日本紀標註

巻之二十

和書門 類
四三七一八 號
一四三 函
一 架
二六 冊

内閣文庫
和書 類
四三七一八 號
二六 冊
一三七 函
九 架
(十二ヤ)

内閣文庫		
番號	和	43718
冊數	26(20)	
函號	137	99

国立公文書館
National Archives of Japan

戊一二三號

日本紀標注巻之二十

敷田年治謹注

孝徳天皇

原本巻首に、日本書記巻第二十五とあり○天萬豊日天皇ハ、惣て美称にて、眞の御名ハ輕皇子と申し、後に孝徳と諡奉れて○軽神道按に此天皇に至り、我國法を變じ、支那國の制度を用ひさせ、従ひし事多ければ、如此傳たるにや、国法ハ即神道ふれむなり、尊佛

天萬豊日天皇

天萬豊日天皇、天豊財重日足姫天皇、同母弟也、尊佛法、輕神道、斮生國魂社樹之類是也、爲人柔仁好儒、不擇貴賤、頻降恩勅、天豊財重日足姫天皇四年六月庚戌、天豊財重日足姫天皇、思欲傳位於中大兄、而詔

曰云云

中大兄、退語於中臣鎌子連、中臣鎌子連議曰、古人大兄、殿下之兄也、輕皇子、殿下之舅也、方今古人大兄在、而殿下陟天皇位、便違人弟恭遜之心、且立舅以答民望、不亦可乎、於是中大兄、深嘉厥議、密

云々六字、為人に書續くべきが錯れたるにや、原注に削生国魂社樹云々とある十字ハ、例に違れバ刪べし、れど姑、原本に従ふ、生国魂ハ、式に摂津国東生郡、難波坐生国咲国魂神社とある是なり○儒ハ博士の字音を借てよめて、字書に儒、學者之称とあり○庚戌十四日○詔曰云々ハ、宣命の文なるを、此紀にハ或ハ省き、或ハ漢文に譯し抔して真を傳へざるハ惜らし○殿下、儀制令に、於三后皇太子上啓称殿下、酉陽雑俎に、秦漢以来於天子言陛下、於皇太子言殿下○舅也、和名抄に母之昆弟為舅、母方乃乎知とあり、

以奏聞、天豐財重日足姫天皇、授璽綬禪位、策曰、咨爾輕皇子云云、輕皇子再三固辭、轉讓於古人大兄、（更名古人大市皇子）曰、大兄命、是昔天皇所生、而又年長、以斯二理、可居天位、於是古人大兄、避座逡巡、拱手辭曰、奉順天皇聖旨、何勞推讓於臣

輕皇子ハ御母の御弟なり○輕皇子云々、是亦宣命の語を省けり○昔天皇所生、是ハ舒明天皇を申、昔とハ前と云が如し○逡巡ハ、後退なり、後漢書許劭傳に、好恥並迹、逡巡、注に自退不仕也○拱手、宇治拾遺五に、こまぬきて少しうつふしたるやうにて、ゐられたりと云々、按に手を左右にして抱くを、コマヌクと云、ほど、礼容の状とも見ゆれ、類聚三代格、貞觀十年六月廿八日格に、住吉平岡鹿

嶋香取等、神主弁祝祢宜皆是把笏、自餘神社ハ未預此例、祭祀之日拱手從事とある所見るべし

帳内ハ親王の舎人を云、軍防令に、給帳内、一品一百六十人、二品一百四十人云々○袈裟 和名抄に、袈裟天竺語也、俗云介佐、飜譯名義集に、袈裟具云迦羅沙曳、此云不正色、從色得名、章服儀云、袈裟之目因於衣色、如經中壊色衣也、會正云、準此本是草名可染衣、故將彼草目此衣號云々

大伴長德、公卿補任に、白雉二年七月薨、字馬養、或鳥養、金村

臣、願出家入于吉野、勤修佛道、奉祐天皇、辭訖解所佩刀、投擲於地、亦命帳内、皆令解刀、即自詣於法興寺佛殿與塔間、剔除鬚髮、披著袈裟、由是輕皇子、不得固辭、升壇即祚、于時大伴長德字馬飼連、帶金靫立

大臣之曽孫、父ハ咋子連也、とあて○字馬飼、舒明四年紀にハ大伴連馬養に作れり、何も是ならむ○犬上君ハ、近江国の地名に依りたる姓にて、其事景行紀に見えたり○豊財天皇ハ、皇極天皇にて、天豊財重日足姫天皇を略書たり、按に歴朝の尊號ハ、御位に即給ふ時、称へ奉りし事大方の例ある故なるべし○皇祖母尊も、スメミオヤノミコトとよむべし、後に太上天皇と申におかど○阿倍内

於壇右、犬上健部君、帶金靫立於壇左、百官臣連、國造、伴造、百八十部、羅列匝拜、是日奉號於豐財天皇、曰皇祖母尊、以中大兄為皇太子、以阿倍內麻呂臣、為左大臣、蘇我倉山田石川麻呂臣、為右大臣、以大錦冠、授中臣鎌子連、為內臣、增封若干戸云云

麻呂は、次に阿倍倉梯麿に作れり、天智七年紀に、見えたるもおなじ、公卿補任に、左大臣阿倍倉橋、一名内麻呂号大鳥大臣、とあり○左大臣、職員令に、左大臣一人、掌統理衆務、擧持綱目、惣判庶事、右大臣一人、掌同左大臣、和名抄に、大臣、於保伊萬宇智岐美とあり、撰集には、此左右大臣を、左のオホイマウチギミ、右の云々、按に萬宇知岐美は、真内君なるべし○大錦冠は別に制て賜れば、非常の冠なり、大化三年に七色十三階の冠を制し給ふ、第七階に大錦冠あれど、其にはあらじ○内臣、職原抄に、孝徳天皇御宇、以中臣鎌子連為内臣、天智朝擧為内大臣云々、此時其位在左右大臣上、とあるに依れば、内臣にては左右大臣の、下に在りと云はむが如し、然れど次に擬宰臣之勢、處官司之上とあるを見れば、既其上に在りとせられたり○増封は戸人なり、續紀十三に、諸家封戸之租、依令二分入官、一分給主、者自今以後全賜其主、同十七に、大政官奏曰、封戸人數縁有多少、所輸雑物其數不等云々、請毎一戸以正丁五六人、中男一人為率、則郷別課口二百八十、中男五十、擬為定數、其田租者毎一戸以四十束為限云々、猶封戸の事は、拾芥抄中の九段に詳なり○云云集解に云云、二字不穏、疑は詔曰、二字の誤りと云きど、是は封を増給ふ宣命を略れるなり懐至忠以下、事立以上二十四

中臣鎌子連、懐至忠之誠、據宰臣

字は、魏志武帝紀に、見えたる全文なり○沙門、飜譯名義集に、佛法及外道、凡出家者皆名沙門、三才圖會に、佛涅槃以沙爲塚、其徒守塚而居、故称沙

之勢、處官司之上、故進退廢置計從事立云云、以沙門旻法師、高向史玄理、爲國博士、辛亥以金策賜阿倍倉梯麻呂大臣與蘇我山田石川麻呂大臣賜或本云練金

門○國博士は、諸國に置かる、學校の生徒を教育せる人を云、職員令大宰府條に、博士一人、掌教授經業、課試學生、義解に教授管国學生となり、續紀三に、下制曰、依令国博士、於部内及傍国取用、然温故知新希有其人、若傍国無人採用、則申省然後、省選擬、更請處分、同三十五に、博士者總三四国一人云々、望請毎国各置一人、並以六考遷替、自今以後立爲恒式、なほ類聚三代格五に、數條を載たり今略○辛亥十五日○金策、文選遊天台山賦に、振金策之鈴々、李善が金策乃錫杖也、云々策聲と注せり○練金コマカ子とあり、釈紀にコナカ子と注せり、熟金は、欽明紀に、熟喫などあり、新撰字鏡に、鍊は祢利加祢と注し、康頼本草に、生鐵を

よみ、神功紀に、鐵鋌をよめり、故
今改つ、練鍊相加よえし書なり
乙卯十九日○
大槻樹之下、皇
極三年紀に、法
興寺槻樹之下、
とあるは、高市
郡なれど、此地
は○盟、下原本
曰字あるか行
れり、集解に削
れるに從ふ、告
以下六十八字
細字に記せり、
今改む○澆薄、
曽丹集に朝な
く庭草こると、
せしほどは妹

乙卯、天皇皇祖母尊、皇太子、於大槻樹之下、召集群臣、盟、告天神地祇曰、天覆地載、帝道唯一、而末代澆薄、君臣失序、皇天假手於我、誅殄暴逆、今共瀝心血、而自今以後、君無二政、臣無貳朝、若貳此盟、天灾地妖、鬼誅人伐、皎如日月也、改天豐財重日足姬天皇四年、為大化元年、

が垣根はうも
らぎふれり、字
書に澆薄也、と注せり○心血、北史齊紀に、前持心血、遠以示王○大化釈紀に、ハ
ジメテナル、とよめれど、素よりの本訓なり、ともに聞えがたし、猶年号訓讀の事
え、天武紀朱鳥の處に云べし、上代は年号を年名と
云、ア、續紀九に、神亀二字、御世乃年名止定メ氐とあり
戊辰二日○息
長足日廣額天
皇は、舒明天皇
を申○小足媛、
帝王編年紀に、
男足に作れり
○丙子十日○
調使、原本調進
に誤れり、今集
解に改めたるに
從ふ○津館は
難波津に在る

大化元年秋七月、丁卯朔戊辰、立息長足日廣額天皇女、間人皇女、為皇后、立二妃、元妃、阿倍倉梯麻呂大臣女、曰小足媛、生有間皇子、次妃、蘇我山田石川麻呂大臣女、曰乳娘、丙子、高麗百濟新羅、並遣

館なり、續紀三に、饗新羅客于難波館○明神、續紀一に、現御神止、大八嶋国所知、同四に、現神八洲御宇、續後紀九に、平城大宮に、現御神止坐而云々、公式令に、明神御宇、日本、天皇、詔旨義解に、謂以大事宣於蕃国

使進調、百濟調使、兼領任那使任那調、唯百濟大使佐平縁福、遇病留津館而、不入於京、巨勢徳太臣、詔於高麗使曰、明神御宇日本天皇詔旨、天皇所遣之使、與高麗神子、奉遣之使、既往短而將來長、是故可以温和之心、相繼往來而已

使之辭也云々、按に天皇ハ實に神に坐せるゆゑ、万葉に王者神西座者とも、明津神吾皇之、などあるを見るべし○御宇ハ、宇内を御にて、宇ハ四方上下を云よし、淮南子の注に見えたり○日本を、ヒノモトとよむべき事、二年、紀に見えたり○詔旨、公式令詔書式の、義解に、臨時大事為詔、尋常小事為勅也となり○

高麗、神子ハ彼国王を指、東国通鑑に、高句麗始祖高朱蒙立、先是扶餘王解夫婁老無子、祭山川求嗣云々、有小兒金色蛙形、王喜曰、此天賚我令胤、養之云々、是靈異ある神の、子孫と云意なり○既往短而將來長ハ、国に還往し間短、去て、來むとする間長しとなり、其ハ船にして、滯るを云意なるべし

遠皇祖ハ、神功皇后より、次々の天皇が申○三絞之綱、舊讀ミツセとよめるも非なり、字鏡集類聚名義抄等に、絞をヨルと注せれバ、ミツヨリとよむべし、万葉四に、吾以在三相ニ搓流、絲用而附手益物今曾

又詔於百濟使曰、明神御宇日本天皇詔旨、始我遠皇祖之世、以百濟國為內官家、譬如三絞之綱、中間以任那國、屬賜百濟、後遣三輪栗隈君東人、觀察任那國堺、是故百濟王、隨勅、悉示其堺、而調有闕、由是却還其調、任那所出物者、天

悔寸、出雲風土記ふ、三身之綱打挂而云々、是ハ麻ふまれ何ふはま、三筋搓合て索たるを云、譬たる意ハ、新羅百濟高麗ハ、三搓の綱の如く、堅搓合せたマとなり○三輪栗隈君ハ、三輪姓ふして、山城国久世郡ある、栗隈ふ由あるにや○不易面、万葉十二ふ、荒津海、吾幣奉将齋、早還座面變不為、同十八ふ、可久之都祢見牟、於毛我波利世須○鬼部ハ、居所の名ら○戊寅十二日○聖王ハ、我聖帝ふて、支那王を指ふあらず○

皇之所明覧、夫自今以後、可具題國與所出調、汝佐平等不易面來、早須明報、今重遣三輪君東人馬飼造名闕又勅、可送遣鬼部達率意斯妻子等

戊寅、天皇詔阿倍倉梯萬侶大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、當遵上古

己卯十三日○庚辰十四日○先以祭鎮神祇、禁秘御抄ふ、凡禁中作法先神事、後他事、且暮敬神之叡慮無懈怠云々、三代實録廿七ふ、停内裏灌佛、以行神事也とあて、按ふ上代神事政事打合たるえ政事を後ふし、神事佛事打合たるハ、佛事を停務ふ、是古例なるをや○

聖王之跡、而治天下、復當有信可治天下、已卯、天皇詔阿倍倉梯麻呂大臣、蘇我石川萬侶大臣曰、可歷問大夫與百伴造等、以悦使民之路、庚辰、蘇我石川麻呂大臣、奏曰、先以祭鎮神祇、然後應議政事、是日、遣倭漢直比羅夫於尾張國、忌部首子麻呂於美濃國、課供神之幣

供神之幣は、大嘗祭に供る物を云ふ、顕宗紀に、山部連先祖、伊與來目部小楯、於赤石郡親辨新嘗供物云々

八月丙申朔庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、隨天神之所奉寄、方今始將修萬國、凡國家所有公民、大小所領人衆、汝等之任、皆作戸籍、及校田畝、其園池水陸之利、與百姓俱

庚子十五日○国司仁德紀に、既見えたれど、爰におゐてはよく定りぬ○所奉寄、大祓詞に、事依奉岐、如此依志奉志、續紀九に、與佐斯奉志麻尓麻尓、など多かり、惣て事を令るを、ヨサスとは云へり、奉とは天津神より奉傳へて、其を国司等に令賜ふを、天つ神之云々とは、云へるなるべし○任、万葉二に、不奉仕国乎治跡、皇子隨任賜者、同十七に、大王能、麻氣乃麻尓末尓など多し、任も寄も同義なり○戸籍は、允恭紀に注せり○田畝も、タハタと訓むべし、畝は墾田の略にて神代紀に陸田種子、拾遺集に、片山にもたやくをの子、かの見ゆる、ミ山ばくらも、よきて畑やけ、此畑を和名抄に畠、波太介と注し、万葉十八に、宇惠之田毛、麻吉之波多氣毛、など云る氣も毛にて、生る物を主として、畑に呼添たるなめり、猶下に云べし○園池職員令園池司に、正一人掌諸苑池、種殖蔬菜樹菓等事、義解に凡苑池之所育、有可以供御者、皆司其地、令不浪侵也、原本園を薗に作れり、今集解に改めたるに從ふ

又國司等在國、不得判罪、不得取他貨賂、令致民於貧苦、上京之時、不得多從百姓於己、唯得使從國造郡領、但以公事往來之時、得騎部內之馬、得飡部內之飯、介以上奉法、必須褒賞、違法當降爵位、判

從国造、是よりして始て、国造の權を折き、国司の威を増さしむ、凡国造は功臣の後と、皇別とに任給ひしも、神代の国主の遺風なりしを、爰に至りて、郡縣の制に本つける、是世の一

官以下取他貨賂二倍徵之遂以（變せる之○郡領ハ、郡の大少領なり、猶下に見ゆ○介以上、）輕重科罪（和名抄に、国曰介、郡曰少領、皆須介○奉法ハ、長官次官の恪懃を云○爵位ハ、国司郡司を云○判官ハ、和名抄に、国曰掾、郡曰主政、皆萬豆利古止比止と注せり、但是ハ京官諸国を惣云へり○）其長官從者九人、次官從者七人、（主典ハ文人にて、和名抄に佐官と記せり○）主典從者五人、若違限外將者、主與所從之人、並當科罪、若有求名（縣稲置、成務紀に、縣邑置稲置とある處に注せり○倭国六縣ハ、彼国内にて、六郡と云事、加、式の祈年祭）之人、元非國造伴造縣稲置、而輙詐訴言、自我祖時、領此官家、治是郡縣、汝等國司、不得隨詐便牒於

（詞に、御縣に坐皇神等前に白く、高市、葛木、十市、志貴、山邊、曽布、登御名者白て、此六御縣に生出る甘菜云々とあるハ、此條と相似たり、志かるに大和のみを挙て、其他を記さゞるハ、先づ六縣より肇め給へるなり○）朝、審得實狀、而後可申、又於閑曠之所、起造兵庫、收聚國郡刀甲弓矢、邊國近與蝦蛦接境處者、可盡數集其兵、而猶假本主、其於倭國六縣、被遣使者、宜造戸籍、并校田畝、汝等國司、可明聽退、即賜帛布各有差

（校田畝ハ、班田のはじめにて、其事持統六年紀に注すべし○原本細字に、謂撿覈墾田頃畝、及民戸口年紀といふ十三字ありて、集解に後漢書光武紀の文なるが、後に換入せしとして刪れるに從ふ）

鍾匱の鍾ハ、鍾に通、て、櫃ハ和名抄に比都と注し、匱もれに(?)じ、叔姦吏のために、訴が曲らる丶時ハ、鐘を撞く、若シ其尊長の者、其寃が審に為ざるときハ、記載して匱に納よとなり、是ハ支那国にて、禹と云っ王が時に、為しを、准南子に記せるを見て、其法が聊更へて、物し給へるあり○勘當が、カウカへ、とよめるハ、カムガへの轉語にて、是ハ勘合の字音なれバ、古言にハあらず、然ど換べきがたらねバ、志ばらく舊讀に從ふ○題年月とハ、公式令詔

是日設鍾匱於朝、詔曰、若憂訴之人、有伴造者、其伴造先勘當而奏、有尊長者、其尊長先勘當而奏、若其伴造尊長、不審所訴、收牒納匱、以其罪罪之、其收牒者、昧旦執牒奏於內裏、朕題年月便示郡卿、或懈怠不理、或阿黨有曲、訴者可以撞鍾、由是懸鍾置匱於朝、天下之民、咸知朕意、又男女之法者、良男良女共所生子、配其父、若良男娶婢、所生子配其母、若良女嫁奴、所生子、配其父、若兩家奴婢所生子、配其母、若寺家仕丁之子者、如良人法、若別入奴婢者、如奴婢法、今克見人為制之始、

書式に、年月御畫日とある是なり○阿黨ハ片幸にて、俗に贔負と云っが如し、僧尼令に、阿黨明扇、義解に阿曲明黨○良男良女、民に良賤あるをとハ、上に見えたる○良男娶婢、所生子配其母、戸令に、凡官戸陵戸家人、公私奴婢與良人為夫妻、所生男女不知情者、從良、皆離之、其逃亡所生男女皆從賤

癸卯八日○大寺ハ百濟寺に

癸卯遣使於大寺、喚聚僧尼而詔

て、大和国廣瀬郡に在り○磯城嶋宮御宇云々、欽明天皇紀中○明王ハ聖明王を云ふ○譯語田宮ハ敏達天皇の大宮なり、式に大和国城上郡他田坐天照御魂神社、とある此地なり○能仁ハ釋迦の漢名なり、翻譯名義集、釋迦牟尼佛の釋に、擁華云、此云能仁寂默、寂默、故不住生死、能仁、故不住涅槃云々、祖庭事苑に、梵云釈迦、此言能仁、とあるが見るべし、原本能仁下に、世、字ありて、通證に世、字下疑

曰、於磯城嶋宮御宇天皇十三年中、百濟明王、奉傳佛法於我大倭、是時群臣、倶不欲傳、而蘇我稲目宿禰、獨信其法、天皇乃詔稲目宿禰、使奉其法、於譯語田宮御宇天皇之世、蘇我馬子宿禰、追遵考父之風、猶重能仁之教、而餘臣不信、此典幾亡

脱尊字と注し、集解にハ行れりと注して削れり、實に世尊と見てハ拙し、故姑く集解に從ふ

繡像、推古紀に、銅繡丈六佛像とあるに注す○狛ハ高麗なり○大法師、三代實録八に、制定僧綱位階、詔曰国典所載、僧位之制、本有三階、滿位法位大法師位是也、僧綱凡僧同授此階、位號不分、尊卑無別、論之物意、實不可然云々○福亮、元亨

天皇詔馬子宿禰而、使奉其法於小墾田宮御宇之世、馬子宿禰奉為天皇、造丈六繡像、丈六銅像、顯揚佛教、恭敬僧尼、朕更復思崇正教、光啓大猷、故以沙門狛大法師、福亮、惠雲、常安、靈雲、惠至、寺主、僧旻、道登、惠隣、惠妙、而為十師、別以惠妙法師為百濟寺寺主

国立公文書館
National Archives of Japan

釈書ニ、釈福亮ハ呉国ノ人、受三論于嘉祥、齊明四年、内臣鎌子於陶原ノ家ノ精舎、請亮講維摩詰経○恵雲、舒明紀ニ見ゑたり○常安、舒明紀ニ清安といへるハ是なり○恵資ハ至下ニ沙門恵資といへり同人なり○寺主、原本細字に書なり、釈紀ニ據りて改む、按ニ此に突然寺主と書れるハ心得ず、是ハ必一人の僧名ニして、字形の誤れるか○道登、白雉元年紀ニ見ゑたり○十師、爰ニ見ゑたるハ九人ニて、一人足らず是ハ上ニ寺主といへるも一僧名の誤れるニや、續紀卅二ニ、禪師秀南廣遠延恵云々、或持律或足稱或看病或著聲、詔充供養並終其身、當時稱為十禪師、其後有闕擇清行者補之、續後紀十七ニ、擇有智行者於延暦寺、始置定心院十禪師、勅曰云々、十禪師若有闕、擇才行共備人衆所推者、申官補之、塵添𡋽嚢抄十五ニ、十禪師ハ光仁天皇寶亀二年三月ニ、始テ被置所也其後ヨリ十人ノ中ニ闕アレバ、海内ノ名徳ヲ撰テ、補之云々、爰ニ寶亀二年始テ被置とハ、其より中絶為ざるを云り○寺主、推古紀ニ注せり奴婢ハ、寺家ニ使ゆるゝものと云り○實ハ身ム真なり○來目臣、姓氏録ニ、久米臣ハ袮本同祖、

此十師等、宜能教導衆僧、脩行釋教、要使如法、凡自天皇至于伴造、所造之寺、不能營者朕皆助作、令

天足彦国押人命五世孫、大難波命之後也、天武十三年紀ニ、來目臣ニ賜姓曰朝臣○三輪色夫君ハ、下に三輪君色夫ニ作とり○法頭、推古紀ニ注せり○戊辰三日○古人皇子ハ、古人大兄皇子ニて、舒明天皇の御子なり○蘇我田口臣川堀ハ、姓氏録ニ、田口朝臣、武内宿祢

拜寺司等與寺主、巡行諸寺、驗僧尼奴婢田畝之實而、盡顯奏、即以來目臣名闕三輪色夫君、額田部連甥、爲法頭、九月丙寅朔、遣使者於諸國、治兵或本云、從六月至九月、遣使者於四方國、集種種兵器戊辰、古人皇子、與蘇我田口臣川堀、物部朴井椎子、吉備笠臣垂、倭漢文直麻呂、朴市秦造田來津、謀反或本云、古人大子、或本云古人大兄、此皇子入吉野

大臣之後也、蝙蝠臣、豊御食炊屋姫天皇御世、家於大和国高市郡田口村、仍號田口臣○物部朴井椎子、旧事紀ニ、物部荒猪連公榎井臣等祖、姓氏録ニ、榎井部饒速日命四世孫大矢口根大臣命之後也、氏人ニハ齊明紀ニ、物部朴井鮪と云人見ゆ、是ハ椎子と同人ニハあらじか考ふべし、朴井ハ和泉国の地名なるを、推古紀に見えたり○笠臣ハ應神紀ニ注せり、原本臣ノ字を脱せり、下文ニよりて補ふ○朴市秦造田来津ハ、天智紀に見えたり

丁丑十二日○阿倍大臣ハ阿倍倉橋麻呂を云○蘇我大臣ハ蘇我山田石河麻呂なり○菟田朴室古の菟田ハ大和国の郡名、姓氏録ニ複室連ハ火明

山、故或云吉野太子、垂此云之娜屢。

丁丑、吉備笠臣垂、自首於中大兄曰、吉野古人皇子、與蘇我田口臣川堀等、謀反、臣預其徒。或本云、吉備笠臣垂、言於阿倍大臣與蘇我大臣曰、臣預於吉野皇子謀反之徒、故今自首也。中大兄、即使菟田朴室古、高麗

命十七世孫、呉足尼之後也、山猪子連等、仕奉上宮豊聡耳皇太子御杖代爾時太子巡行山代国、于時古麻呂カ家在山城国久世郡水主村、其門有大榎樹、太子曰是樹如室大雨不漏、仍賜榎室連とあり、古ハ名なり○高麗宮知ハ、姓氏録ニ、高麗朝臣、高句麗王好台七世孫延興王之後也○大市皇子ハ、古人大兄王の更名なりと、上に見えたり○阿倍渠曾倍臣、姓氏録ニ、許曾倍朝臣、阿倍朝臣同祖、大彦命之後也とあるを、按ニ渠曾倍ハ、攝津国嶋上郡の地名ニて、古曾部村あれバ、安倍氏の人彼處ニ住居せしニや、安倍磐城臣、安倍安積臣、阿倍長田臣、推て知るべし、名ハ洩たり

宮知、將兵若干、討古人大市皇子等。或本云、十一月甲午三十日、中大兄使阿倍渠曾倍臣、佐伯部子麻呂二人、將兵三十人、攻古人大兄、斬古人大兄與子、其妃妾自經死。或本云、十一月、吉野大兄王謀反、事覺伏誅也。

甲申十九日○元數ハ大數ニて、人口を録するを云○標代民ハ、

甲申、遣使者於諸國、録民元數。仍詔曰、自古以降、毎天皇時、置標代

名代の部曲にて、鳥取部白髮部等の類なる成、此時に停らるへし○園陵、字書に、帝王陵寢を曰園となり○損上益下は、易の益卦彖の語之、節以下は節卦彖の語を記せり、害民上に不字を脱せし、即原書に加へたるに從ふ○水陸は、水田陸田を云ふ○癸卯九日○難波長柄

民、垂名於後、其臣連等伴造國造、各置己民、恣情駈使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼幷數萬頃田、或者全無容針少地、及進調賦時、其臣連伴造等、先自收斂、然後分進、脩治宮殿、築造園陵、各率己民、隨事而作、易曰、損上益下、節以制度、不傷財不害民、方今百姓猶乏、而有勢者、分

豐碕中臣宮處氏本系帳に、長柄に那賀良の訓注を附け、攝津風土記に、長樂豐前に作れし、此長柄を荒木田久老が、ながえとよみたるは失考、此宮趾を攝津志に、在西成郡本莊村と記せり、年治按に、同郡山口村惣社の地、蓋豐碕宮の旧趾ならむ、地理おのづから然見ゆ、より、是より後歴朝幸于難波宮とあるは、此宮かし○戊午廿四日○枯査、和名抄に、査は水中浮木也宇岐々、源氏松風に、いく

割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後、不得賣地、勿妄作主兼幷劣弱、百姓大悅、冬十二月乙未朔癸卯、天皇遷都難波、長柄豐碕、老人等相謂之曰、自春至夏、鼠向難波遷、都之兆也、戊午、越國言、海畔枯査向東移去、沙上有跡、如耕田狀、是年也大歳乙巳

かへりて、乃加に耘耡すへし川に、うき木にのりて、これかへるらん○耕田状は砂に跡ある、田を犁たる状にや

賀正禮は、朝廷拝なり、公事根源朝賀條に、辰の時に、天皇大極殿に行幸ありて、行なせ給ふなり、群臣皆禮服を着して、さながら御即位の儀式におなじ、内弁などもありて、開門などありて、やゝしの鼓をうたしむれば、群臣列して門に入、天子高御座につかせ給へば、兵庫寮鉦をうつ、執翳いで、帳を八字にかゝげ、近仗警蹕をせうし、圖書主殿香をたく、典儀再拝を

二年春正月甲子朔、賀正禮畢、即宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處處屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處處田莊、仍賜食封大夫以上、各有差、降以布帛賜官人百姓、有差、

となふ、群臣此時再拝す、奏賀奏端とて、二人のもの庭にすゝみて、祝申をあり云々、拝禮字を常には、ヰヤとよめれど、古書にもヲガムとよめり、折屈の義なれば、身を屈むるぞ禮の本なる○子代の民は、御子ならざる方は、部曲を置て御名を、後世に傳ふると、上の標代民におなじ○別は皇別なり、景行四年紀に、天皇之男女前後云々、七十餘子皆封国郡、各如其国、故當今時、謂諸国之別者、即其別王之苗裔焉○国造、中臣宮處氏本系帳に、大化二年正月改定諸国国造出職制、而始置給国司と有る如く、其職制を止め給ひて、其號は猶本の儘なりし故三代實録貞觀三年十一月、伴宿祢善男ら奏言中に、孝德天皇世、国造之號永從停止と、有るは即此二年正月なり○村首下に審告村首とある、古注は首、長也と有れば、ヲサとよむべし○部曲安閑紀に見えより○田荘、崇峻紀に注せり○食封は、上に増封と有るに注しつ○大夫公式令に、司及中国以下五位称大夫

京師は、上に白虎通を引て注せり○關塞は、二字を合てセキとよむべし、按に是より前

又曰、大夫所使治民也、能盡其治、則民頼之、故重其禄、所以為民也、

其二曰、初脩京師、置畿内國司郡

国立公文書館 National Archives of Japan

に、關てふとの見えざるハ、序なくして滅たるく、宣化紀に、

司關塞斥候防人驛馬傳馬、及造

鈴契定山河

筑紫国者、遐邇之所朝届、去來之所關門とあるハ別なり、猶天武紀に至りて、鈴鹿關又龍田山、大枝山の關など見ゆ、軍防令に、凡置關應守固者、並置配兵士分番上下○斥候、推古紀に、間諜者をウカミビトとよめり、窺見人なり、職員令大国、條に、兼知饗給征討斥候、義解に斥ハ逐也、言逐於非常也とあり、原本斥を庁に誤れり○防人ハ埼守にて、蛮国の入寇を防ぐため、兵士を遣りて突出たる埼を守らしむるを云ふ、軍防令に、凡防人在防守固之外各量防人多少、於當處側近、給空閑地、逐水陸所宜、斟酌營種並雜菜、以供防人食云々、續紀二十に、勅曰太宰府防人、項年差坂東諸国兵士發遣由是路次之国、皆苦供給、防人産業難辨濟、自今已後宜差西海道七国兵士一千人充防人司依式鎮戍云々○驛馬傳馬、万葉十一に、驛路爾引舟渡直乘爾同十八に、佐夫流兒我、伊都伎之等能爾、須受可氣奴、波由麻久太禮利、佐刀毛等騰呂爾とありて、驛ハ速馬の切なり、廐牧令に、凡諸道置傳馬、大路二十疋、中路十疋、小路五疋、使稀之處、国司量置不必須足皆取筋骨強壯者充、毎馬各令中中戸養飼、若馬有闕失者即以驛稻市替、其傳馬、毎郡各五、皆用官馬云々、按に驛馬ハ、驛に充置を云ひ傳馬ハ驛馬の足らざる時に、充るを云ふ○

鈴契公式令に、凡車駕巡幸京師、留守官給鈴契とあり、上代旅行にハ駅鈴ならずとも、鈴を給しゝと古書に見えたり、契ハ木契にて、俗云割符なり○定山河ハ、成務紀に見えたれど、此御世に再定めしにや

凡京毎坊置長一人、四坊置令一人、掌按撿戶口、督察姧非、其坊令取坊內明廉強直堪時務者充、里坊長、並取里坊百姓清正強幹者充、若當里坊無人、聽於比里坊簡用

京毎坊和名抄に坊ハ萬知と注せり○長一人ハ、坊長なり、原本一字を脱せり、類聚国史及戶令に據て補ふ○令をウナガシと訓めるハ、上より課るにて、万葉四に、葉根蘰令為妹者云々、と令嬰に借たり、かゝる歌ども數首あるを、何れも今為と訓誤れて、姧非以上二十三字ハ、戶令と全同文にて、異なるハ按撿を檢校に作るのみ○

里坊ノ長ハ、里長坊長を云フ○名墾ハ、伊賀国の郡名にて、和名抄に名張ハ奈波利と注し、天武紀に、隱郡に作り○横河、天武紀に、將及横河と有る處に、注べし○兄山、万葉一に、越勢能山時、此也是能倭爾四手者我戀流木路爾有云名爾負勢能山、同三に、往紀伊国超勢能山時、栲領巾乃懸卷欲寸、妹名乎、此勢能山爾懸者奈何將有、是ハ紀伊国那賀郡に在て○赤石ハ、播磨国郡名明石なれど、櫛淵ハ詳ならず○狹々波ハ、神功紀に注せり○合坂、神功紀に、逢坂に作て、彼處に注せり

凡畿内、東ハ自名墾横河以來、南ハ自紀伊兄山以來、兄此云制、西ハ自赤石櫛淵以來、北ハ自近江狹狹波合坂山以來、為畿内國。

郡ハ、アガタとよむべし、其も神武紀に、菟田ノ縣、磐冨縣と有る

凡郡以四十里為大郡、三十里以下四里以上為中郡、三里為小郡、

るハ、大和国宇陀郡添郡なて、内宮儀式帳に、安濃縣、壹志縣、飯高縣、と有るも、後に郡と云、祝詞式に、大和国の六郡を、六御縣と記し、續紀二に、縣犬養連大侶と云人有、一本に郡犬養に作れり、即郡をアガタとよむべき證あり、素国より分れれバ、頒地の轉にて、地をナとよむべきハ、神代紀大己貴神の處に注し、ナをタに轉じ云へるハ、垣内花を燕子花と云へるが如し、此郡をコホリとよめるハ、朝鮮の方言にて、其證ハ訓蒙字會、及類合に見えたり、猶委ハ郡名私考に記しれきつ、類聚国史、延暦十七年三月詔曰、昔難波朝庭始置諸郡、仍擇有勞補於郡領、子孫相襲永任其官とあれど、此御世始めて置しにハあらで、郡を大上中小に分ち給ひしを如斯云へて○四十里云々、里のことは下に見えたり、戸令に、凡郡以廿里以下十六里以上、為大郡、十二里以上為上郡、八里以上為中郡、四里以上為下郡、二里以上為小郡、義解に謂郡、不得過廿里、若餘五十戸以上者、隷入比郡、若隷入比郡地勢不便、或不獲已而應分者、別録申官云々、如此大寶以後ハ、大上中下小の五等に分てり○郡司、雄略紀に司ノ字に、御奴の旁注有て、持統紀に、以無位人任郡司者、

其郡司、並取國造性識清廉、堪時務者、為大領少領、強幹聰敏、工書筭者、為主政主帳。

以進廣貳授大領、以進大參授小領、政事要略廿七ニ、大政官去年八月廿日、下式部省符、偁、撿正三位行中納言兼右近衛大將陸奥出羽按察使良峯朝臣安世奏状、偁、郡領者今之縣令也、親民行化實在斯人云々、天長二年七月八日○取国造云々、類聚三代格、延暦十七年三月廿九日官符ニ、應任出雲国意宇郡大領事、右被大納言從三位神王宣、偁、奉勅、昔者国造郡領職員有別、各守其任不敢違越、慶雲三年以來令国造帯郡領、寄言神事動廢公務、雖則有闕怠而不加刑罰云々○大領少領、西宮記郡司讀奏條ニ、大領ハ古保乃見ヤツコ、少領ハ爪ナイミヤツコ、和名抄ニ大領ハ加美、少領ハ須介、職員令ニ、大領一人、掌撫養所部、撿察郡事、少領一人掌同大領、○主政主帳、和名抄ニ、主政ハ萬豆利古止比止、主帳ハ佐官、職員令ニ、大郡三主政三人、上郡二人、中郡一人、掌糺判郡内審署文案勾稽失察非違、主帳大郡三人、上郡二人中郡以下並一人、掌受事上抄、勘署文案撿出稽失讀申公文

鈴傳符尅數ハ、公式令ニ見ヘたるにおなじ、同書ニ、事速者一日十駅以上、事緩者八駅、還日事緩者六驛以下、親王及一

凡給驛馬傳馬、依皆鈴傳符尅數、凡諸國及關、給鈴契、並長官執、無次官執、其三曰、初造戸籍計帳班田、收授之法

位、驛鈴十尅、傳符三十尅、三位以上驛鈴八尅、傳符二十尅、四位ハ驛鈴六尅、傳符十二尅、五位ハ驛鈴五尅、傳符十尅、八位以上驛鈴三尅傳符四尅、初位以下ハ驛鈴二尅、傳符三尅、皆數外別給驛子一人云々、傳符ハ俗ニ先觸と云ふものなり○諸国及関給鈴契云々、鈴契ハ上ニ見ヘたり、公式令ニ、凡諸国給鈴者、大宰府二十口、三関及陸奥国、各四口、大上国三口、中下国二口、其三関国、各給関契二枚云々○初造戸籍、按ニ戸籍ハ、允恭天皇の御世ニ始まりつれバ、彼處に注しつ、此ニ初造といへるハ、あらためて造り初しにや、戸令に凡戸籍六年一造、起十一月上旬、依式勘造、里別為巻、寫三通、其縫皆注某国某郡某里某年籍、五月卅日内訖、二通申送太政官、一通ハ留国云々、凡戸籍、恒留五比、其遠年者依次除云々、五比とハ三十年の間なるを云ふ、年治往年年籍の脱簡を得て、摸して戸籍雜徴を著しつれバ、参へ云ず○計帳ハ、調庸帳など云ふ、戸令ニ凡造計帳、毎年六月晦日以前、京国官司責所部手實、具注家口年紀云々、賦役令に、凡毎年八月三十日以前、計帳至付民部、主計計庸多少充衛士仕丁釆女女丁等食、以外皆支配役民雇直及食、九月上旬以前申官云々、唐書食貨志ニ、有計帳具來歳保役以報度支○班田ハ、田令ニ、凡田ハ六年一班、神田寺田不在此限、若以身死應退田者、毎至班年即從収授、凡應班田者、毎班年正月三十日内申太政官、起十月一日京国官司預校勘造簿、至十一月一日、摠

集應受之人、對共給授、二月三十日内使訖、凡給口分田者、男ハ二段女ハ減三分之一、五年以下不給、其地有寛狭者、從郷土法云々、此口分田のとハ、委く班田考ニ記しおゝれバ、爰ニ略○収授ハ、死亡の人の田を収め、又班つべき人ニ授くるを云

五十戸為里云々、戸令の義解ニ、謂若満六十戸者、割十戸立一里、置長一人、其不満十家者隷入大村、不須別置也、按ニ和名抄郷名に、餘戸或餘部と書けるが、九十七郷見ゑたり、皆

凡五十戸為里、毎里置長一人、掌按検戸口、課殖農桑、禁察非違、催駈賦役、若山谷阻險、地遠人稀之處、隨便量置、凡田、長三十歩、廣十二歩為段、十段為町、段租稲二束二把、町租稲二十二束

五十戸ニ足らざるを立たるニて、是を餘戸とよめるハ非なり、アマリべとよむべし其も安房国安房郡郷名、神餘を加無乃安萬里と注せり、神戸の餘戸なり、又河内国丹南郡ニ、餘部村あり、土人もアマンベと呼へり、是らを併せ按ニ、餘戸もアマリべあり、此里を郷ニ革めとるハ、元正天皇靈亀元年の式ニ依れるよし、出雲風土記意宇郡、郷名ニ見ゑたり、原本若山谷云々以下、十五字ハ次の二十二束ノ下ニ入きり、今戸令に據りて改む○田長三十歩、雜令ニ凡度地五尺為歩、三百歩為里、拾芥抄ニ田ハ以方六尺為一歩、卅六歩為一段頭、三百六十歩為一段積云々、段をキダとよめるハ、神代紀ニ、斬軻遇突智為三段、三代實録二ニ、水田七町四段云々、是ハ分かれなり○町和名抄ニ、町ハ田區也、和名末知となり、田と田の界を云へる名なれバ、間道あるべし、古哥に千町田とよみ、拾芥抄ニ、一町積三千六百歩也となり○租稲、神祇令田租の義解ニ、新輸曰租、經貯曰税也、田令の義解ニ、段地獲稲五十束、束稲舂得米五升也、即於町者須得五百束也按ニ一段米二石五斗にして、租稲二束二把ハ、米一斗一升あり、然バ収獲の二十ガ一ニたらざるなり、白雉三年紀ニ、段租稲一束半、町租稲十五束となり、一束半ハ米ニして七升五合なれバ、極て減したるにて、其後沿革なり、續紀慶雲三年九月紀に、遣使七道、始定田租法、町ヶ十五束となるハ、白雉の税ニ倣へり、其後類聚国史八十三、延暦十六年六月詔曰、古者什一而税、謂之正中、三代因循、頌聲作矣、国家薄征利農、勤恤民隱、是以制令之日、田一町租定為二十二束、其後有勅處分減為一十五束、以今况古、輕重相懸、而今民部勘租之例、通計国中以七分已上為定、所餘三分者任国司處分、如今諸国之司、偏執斯例、雖遇年豊穰、全徵其租而、至於納官

不過七分、其所餘者常事截留、農夫以之受弊貪吏因茲擅利、興言於此事乖善政、自今以後收租之法、宜計人別所營町段、仍作十分收八免二、其八分之内計損四分若合門被害産業全已、如此之類具録言上、又延暦十九年五月、勅天下田租改張前例、十分之内免而收七、夫降詔革例、永為濟民、而国郡官司或不頒行、遂令恩渙空施、恵澤未給、吏無絶姦、民不免弊、宜下知諸国不得更然、如不改轍必處重科其貢調之日民集之時、便遣敕使精加訪問、若有違勅刑惟莫宥云々、猶政事要略五十三、弘仁十二年、明法博士額田国造今足、租束積の勘案ありて、文長ければ略す○二把、天武紀に、麻一條云々、常語に一把と云へり

賦役ハ、賦役令義解に、謂賦者歛也、調庸及義倉、諸国貢獻物等為賦也、役者使也、歳役雑徭等為役也、爰に舊賦役とあるも、此時改制為給へバなり○

其四曰、罷舊賦役而行田之調、凡絹絁絲緜、並随郷土所出、田一町絹一丈、四町成疋、長四丈廣二尺半、絁二丈二町成疋、長廣同絹、布四丈長同絹絁、一町成端、別收戸

田之調ハ、田租の外に、其郷土に出る物を輸さしむるを云ふ○

別之調、一戸皆布一丈二尺、凡調副物塩贄、亦随郷土所出

絹ハ、類聚名義抄、字鏡集等に、キヌと注し、常語にも然云へり、しかるに谷川氏がキヌも、絹の音をもて訓ずるなり、衣をキヌといふハ、絹も衣にすべき、ものなれバなりと云へり、按に此説非なり、景行紀に、比莒瑘阿利勢磨、岐農岐勢摩之瑪となり、人に在ハ衣着ましにて、支那字もしらざりし世の、御歌にもキヌとよみ給へるをや、和名抄に絹、繊也加止利と注せり、古歌に夏衣香取と、下總国の地名に係たれバ、カドリと濁音によむべし、是ハ葛を細ゝに嫩かに織たる絹なれバ、カドリギヌとも云へり、千載集に、立ゝふるかどりのきぬの、しらがさね云々○絁ハ、和名抄に、繒似布也、阿之岐沼と注せり、悪絹なり、賦役令義解に、細為絹也麁為絁也、按絹絁、下に、布字あるべし○疋後撰集に、呉もとり、あやにこひしくありしかバ、二むら山も、こえずなりにき、相摸集に、から錦ふたむら山の、もみち葉を、たゝでこそ見め、秋も過とも、是ハ綾錦の疋を兼たり○半ハ五寸なり○端も布に云て、上の疋におなじ、今二端を疋と云ふに異あり○原本細字に、絲綿絇屯諸處不見の、八字あり、集解に私記攙入として、削れるに従ふ、賦役令に絲八両、綿一斤布二丈六尺、並二丁成絇屯端云々、戸別之調、續紀三に、准令京及

畿内ノ人、身輸調、宜能入身之布、輸戸別之調、乃異外邦之民、以優内国之口云々○皆布、一本貲布ニ作れり、和名抄ニ貲布、佐與美乃沼能、齋宮式ニ細布をよめり、布のよろしきを云○調副物ハ、調庸の外ニ副物なり、賦役令ニ、調副物義解ニ、謂此唯為正丁、不及次丁中男とありて、其品物數種を記せり官馬字の如し、

凡官馬者、中馬毎一百戸輸一疋、

原本官長ニ誤れり、通證に改たるに從ふ○

若細馬、毎二百戸輸一疋、其買馬

細馬、廐牧令ニ凡廐ハ細馬一疋、中馬二疋、駑馬三疋、義解ニ細馬者上馬也と注せり、天武紀ニ、乘馬之外更設細馬○刀甲云々、軍防令ニ、凡国司毎年孟

直者、一戸布一丈二尺、凡兵者人身輸刀甲弓矢幡鼓、凡仕丁者、改舊毎三十戸一人、而毎五十戸一人、以充諸司、以五十戸充仕丁一人之粮、一戸庸布一丈二尺、庸米

冬、簡閲戎具、義

五斗

解ニ謂戎具者、国内百姓随身弓箭刀劔等之類也○一人ノ下原本細字ニ、以一人充廝と、二所ニ記せり、賦役令ニ、凡仕丁者毎五十戸二人、以一人充廝丁とあるによりて、後人の加たると見ゆれバ、削る○庸布、賦役令ニ凡正丁、歳役十日若須収庸者、布二丈六尺、一日二尺六寸云々、次丁二人同一正丁、中男及京畿内不在収庸之例、義解ニ其収庸者、須随郷土所出、不可以布為一例也、是ハ十日の役ニ、一日不足なるときバ、布二尺六寸の價ニて、何品ニまれ、其郷土の産物ニて、納むとなり、此をチカラシロノヌノとよめるハ、唐書食貨志ニ、用民之力、歳二十日閏加二日、不役者日為絹三尺、謂之庸と云る意にや○庸米、上の庸布ニ准へ知るべし、賦役令ニ、主計計庸多少、充衛士仕丁采女女丁等食、義解ニ除當年須役人之外、皆揔輸庸、充衛士女丁食、并役民雇直及食也

采女ハ、既ニ仁徳紀ニ見えて、内寢女の義なりと彼處ニ注せるが如し、此采女ハ、後宮職員

凡采女者、貢郡少領以上、姉妹及子女、形容端正者、従丁一人、従女二人、以一百戸、充采女一人之粮、庸布庸米、

令に記せるを専らとし、續紀二に、令築紫七国及越後国、簡點采女兵衛貢之、但陸奥国勿貢、同十四に、采女者自今以後、毎郡一人貢進之、類聚国史四十、大同元年十月、勅凡貢采女事、明令條、皆限四十以下十三以上、今須氏之長者、擇氏中端正女貢之、其十三以上之徒、心神易移進退未定、宜采女年三十已上四十已下、無配耦者、或貢後適人必令貢替、日本後紀廿二、弘仁四年正月、制令伊勢国壹志郡、尾張国愛智郡、常陸国信太郡、但馬国養父郡、貢郡司子妹、年十六已上廿已下、容貌端正堪為采女者各一人云々、扨采女と書れる由ハ、後漢書皇后紀に、入掖庭為采女注に采、擇也とあり、原本采女一人下之字を脱せり、類聚国史に據りて補ふ〇子代離宮、次に見ゆ〇兵庫、續紀卅六に、左右兵庫兵器鳴動、其聲如以大石投地也、續後紀九に但馬国言養父郡兵庫鼓無故夜鳴、又氣多郡兵庫夜自鳴、文德實録十に、肥後国言、菊池城院兵庫鼓自鳴、又若狹国言、兵庫鳴如振鈴、三代實録二に、筑前国志摩郡兵庫鼓自鳴、同十二に、若狹国言云々兵庫鳴、同十八に、肥前国杵嶋郡兵庫震動、同十九に、壹岐嶋兵庫鳴、因幡国兵庫火、佐渡国兵庫震動、同廿二に、遠江国兵庫自鳴、同卅六に、隠岐兵庫震動云々、如此国毎に郡毎に、非常の設に兵庫を造られしが見るべし爰に国郡を郡国と書れるハ、支那国の制度に習ひたるなり〇狹屋部邑、續後紀八に、攝津国人直講博士、從六位下佐夜部首穎主と云人見ゆ、和名抄同国西成郡讃揚郷あり〇子代屯倉ハ、上代天皇又皇后たち、御子代の部曲を置給ひしを、おのづから地名となりたるなり

皆准仕丁、是月天皇御子代離宮、遣使者詔郡國、脩營兵庫、蝦蛦親附、或本云、壊難波狹屋部邑、子代屯倉、而起行宮、

戊申十五日〇

二月甲午朔戊申、天皇幸宮東門、使蘇我右大臣詔曰、明神御宇日本倭根子天皇、詔於集侍卿等、臣連國造伴造、及諸百姓、朕聞明哲之御民者、懸鐘於門、而觀百姓之憂、作屋於衢、而聽路行之謗、雖芻

日本倭と云こと、神代紀のはじめに注しつ、扨倭根子と申御称ハ、孝靈天皇にはじまり、次に孝元天皇、開化天皇を申し、下りて元明天皇より、次々の謚号に称し、根と

を親む詞なれバ、已尊の御上ふも申せると、此詔ふ始まり、扨此称号を、續紀四ふハ、持統天皇を申、同卅一ふハ、高野天皇を申せり○集侍字の如し、儀式大祓儀ふ大祓處爾參集云々、古注ふ讀、曰末為字古那波禮留とあり○懸鍾於門ハ、上に見えたり、門を類聚国史に、闕ふ作れり○作屋於衢ハ、堯有衢室之問と云ふを云へり○芻蕘ハ草刈童之、孟子に芻蕘者征焉、注ふ芻、草也蕘、薪也○古之治天下以下ハ、漢書孝文紀の、全文を記せり○管子、隋書經籍志、唐書藝文志等ふ、管子十九巻、管仲と記せり、今在ルとの二十四巻なし

芻蕘之説、親問為師、由是朕前下詔曰、古之治天下、朝有進善之旌、誹謗之木、所以通治道而來諫者也、皆所以廣詢于下也

管子曰、黄帝立明堂之議者、上觀於賢也、堯有衢室之問者、下聽於民也、舜有告善之旌、而主不蔽也、

て、此行ふ引タるハ第十八巻、桓公問の篇なり案ふ此書を管夷吾の自撰ありと、傳へ云へれど非なり、第七大臣ふ、管仲ハ天下之大聖也など云ひ、かゝる類ひ多かれバ、自撰ふあらず、披き見るべし○黄帝ハ、史記、本紀ふ、少典之子、姓ハ公孫名ハ曰軒轅○明堂管子ふ、明臺に作れり、淮南子ふ、祀其鬼神於明堂之上、注ふ庿之中謂之明堂、後漢書范冉傳、明堂の注ふ、明者神明之也と云ひ、禮明堂條ふ、明堂也者、明諸侯之尊卑也など云へり○堯ハ帝嚳の子にして、放勛と云ひ、堯ハ謚なり○下聽於民を、管子ふ民を人ふ作れり○舜ハ謚号ふて、名を重華と云ひ、父を瞽叟と云ひし、盲人なり○告善之旌ハ、上の進善之旌ふおなじ○禹も謚号ふて、名を文命と云ひ、顓頊が孫ふて、鯀が子なり○建鼓管子に、諫鼓ふ作れり、漢書何並傳ふ、拔刀剥其建鼓、注ふ一名植鼓建立也、謂植木而旁懸鼓云々、儀禮大射儀ふ、建鼓在阼階西南鼓、注ふ建猶樹也、以木貫而載之樹之跗也、隋書音樂志ふ、建鼓夏后氏加四足謂之足鼓、殷人柱貫之謂之楹鼓、周人

禹立建鼓於朝而備訊望也、湯有總術之廷、以觀民非也、武王有靈臺之囿而賢者進也、此故聖帝明王所以有而勿失、得而勿亡也

懸之謂之懸鼓○訊望字の如し、管子ニ望を唉ニ作り、注ヨ驚問也と有りて、望下の也字なし○湯ハ父を主癸と云ひ、其先玄鳥の卵ありしよし、史記殷本紀に見えたり○総術之廷、管子ニ總街之庭ニ作れり、同書度地篇ニ、百家為里里十ヲ為術術十ヲ為州云々、民非管子ニ人誹ニ作れり○武王ハ、周文王の子ニして、名ハ發と云へり○靈臺之囿、管子ヨ囿を復ニ作れり、説苑脩文ニ積恩為愛積愛為仁、積仁為靈靈臺之所以為靈者積仁也、纂注に左傳注を引て、天子曰靈臺、諸侯曰觀臺非天子不得作靈臺、此實觀氣祥之臺而名曰靈者、以文王之化行似神之精明、故以名焉、詩大雅ニ、經始靈臺經之營之云々○勿亡を管子ニ勿忘者ニ作れり、以上管子の文に○懸鐘云々、上ニ見えたり○不懃、類聚国史ニ懃を勤ニ作れり○比周、上ニ阿黨をよめり、文公十八年、左傳ニ、是與比周、注に比近周密也、漢書谷永傳ニ、比周之虚譽、注ニ阿黨親密也○明直字のおとし、成務紀ニ、幹了をよみ、推古紀ニ軌制をよみ、古今長歌ヨ、ミ垣もりとはくしくも、おもひえず、抄ニ優也治也と注せり、伊勢物語ニ、はだ若ければ、をさくしからず云々、是を真名本ニ不幹と

所以懸鍾設匱、拜收表人、使憂諫人、納表于匱、詔收表人、毎旦奏請、朕得奏請、仍又示群卿、便使勘當、庶無留滯、如群卿等、或懈怠不懃、或阿黨比周、朕復不肯聽諫、憂訴之人、當可撞鍾、詔已如此、既而有民、明直、心懷國士之風、切諫陳疏、納於設匱、故今顯示集在黎民、其表稱、縁奉國政、到於京民、官留使於雜役、云云、朕猶以之傷惻、民豈復思至此、然遷都未久、還似于賓、由是不得不使而强役之、毎念於斯、未嘗安寢、朕觀此表、嘉歎難休、故隨所諫之言、罷處處之雜役、

何里○廢忘、原本癈忘ニ誤れリ○朝集ハ、既ッ雄略紀ニ見えたり、孝課令ニ、凡大貮以下、及国司目以上、毎年分番朝集所部之内見任、及解代皆、須知其在位以來年別狀迹、隨問辨答、義解ニ国守以下、在位一選之內、年別狀迹隨問辨答也、職員令式部省義解ニ、諸國朝集使、依考選及補任郡司之事、集於此省也、民部式ニ、凡朝集使、終事還国者、令ニ二寮勘合官舎溝池堤漆云々等帳、然後移送式部省○乙卯廿二日

昔詔曰諫者題名、而不隨詔命者、自非求利、而將助國、不言題不諫、朕廢忘、又詔集在國民所訴多在、今將解理、諦聽所宣、其欲決疑、入京、朝集者、且莫退散、聚侍於朝、高麗百濟任那新羅、並遣使貢獻調賦、乙卯、天皇還自子代離宮

甲子二月○集侍以下、處斷之まで八、悉宣命文なるを、支那風ニ譯し、古代の姿を失へるハ甚口をーく、淺ましき業ニて○東方八道と云る如、其国ハ今坂東八ヶ国今と八異なりしかど、八国と云、るとなり、扨上代国を道と云しハ、記の景行段ニ、東方十二道とあり、即

三月癸亥朔甲子、詔東國國司等曰、集侍群卿大夫、及臣連國造伴造、并諸百姓等、咸可聽之、夫君於天地之間、而宰萬民者、不可獨制、要須臣翼、由是代代之我皇祖等、共卿祖考俱治、朕復思欲蒙神護力、共卿等治、故前以良家大夫、使治東方八道、既而國司之任、六人奉法、二人違令、毀譽各聞、朕便美

十二国にて崇神紀に四道将軍とあるをも併思ふべし○不擇君臣ハ君も臣も共にとなり○辛巳十九日○集侍以下、例の宣命の譯文なり○笞杖、和名抄に笞之毛度と注せり、即繁木にて、笞とよめるハ細木なり後世ハ竹もて作れど、上代ハ木なりしを、ホツ

厥奉法、疾斯違令、凡將治者若君如臣、先當正己而後正他、如不自正何能正人、是以不自正者、不擇君臣、乃可受殃、豈不愼矣、汝率而正、孰敢不正、今隨前勅而處斷之、辛巳、詔東國朝集使等曰、集侍群卿大夫、及國造伴造、并諸百姓等咸可聽之、以去年八月朕親誨曰、莫因官勢取公私物、可喫部内之

キてふ名にて志るし、杖ハ和名抄に、都恵と注し、即衝座なるべく、是も杖とよめるハ、直生なるべし、獄令に杖皆削去節目、長三尺五寸、訊囚及常行杖、大頭經四分、小頭三分、笞杖大頭三分小頭二分○穗積臣咋、下に嚙に作れり、按に次官に冨制臣あれバ、咋ハ東国の

食、可騎部内之馬、若違所誨、次官以上降其爵位、主典以下決其笞杖、入己物者倍而徵之、詔既若斯、今問朝集使及諸國造等、國司至任奉所誨不、於是朝集使等具陳其狀、穗積臣咋所犯者、於百姓中、毎戸求索、仍悔還物、而不盡與、其介冨制臣、名闕巨勢臣紫檀二人之過者、不正其上云云

守なるしてや○冨制臣、姓氏録に布勢朝臣、孝元天皇皇子、大彦命之後也○巨勢臣紫檀、天武紀に巨勢朝臣辛檀努に作れり同人なる

介朴井連押坂連、と称せど、介え一人なるべし、然云、二国の介り○臺直姓氏録に、漢釋吉王之後也○朝倉君、井上君、和名抄に、上野国那波郡郷名朝倉、甲斐国山梨郡郷名、井上、井乃倍○兵代之物、通證に兵之類也、古事記百取机代之物云

凡以下官人、咸有過也、其巨勢徳禰臣所犯者、於百姓中、毎戸求索、仍悔還物而不盡與、復取田部之馬、其介朴井連押坂連名並闕二人、者不正其上所失、而龖共求己利、復取國造之馬、臺直須彌、初雖諫上、而遂倶濁、凡以下官人、咸有過也、其紀麻利耆拕臣所犯者、使人

云、集解に代蓋質、借兵以物為質也、と云へり、此二説何き是ならむ○丹比へ、河内国の郡名○百舌鳥ハ、和泉国大鳥郡の地名にて、仁徳紀に見えたり、下に百舌鳥土師連土徳てふ、人名も見ゆ、長兄ハ名なり○癬亀、和名抄に、癬俗云銭加佐とあるハ、癬瘡なり、集解に疥

於朝倉君井上君二人之所、而為牽來其馬視之、復使朝倉君作刀、復得朝倉君之弓布、復以國造所送兵代之物不明還主、妄傳國造、復於所任之國、被他偷刀、復於倭國被他偷刀、是其紀臣其介三輪君大口、河邊臣百依等過也、其以下官人、河邊臣磯泊、丹比深目、百舌鳥長兄、葛城福草、難波癬俱毗柯梅

癩の轉と見て、癖亀と解れるハ、甚しきひが言なり、然ど癖字とクヒとよめる義ハ考へえず、細字に倶毗柯梅と有るハ、訓注の例に違れど、姑く本に從ふ〇犬養姓氏録に、神魂命十九世孫、田根連之後也〇八人と、河邊臣以下を云ふ〇德史詳ならず、此姓に闕名の細字なきハ、落たるなり湯部通證に、雄略紀の湯人を引合せたり〇草代之物ハ馬寮に輸べき、乾草を他物にて調ぎむを其代おりしたるまや

龜犬養、五十君、伊岐史麻呂、丹比、犬眼、凡是八人等咸有過也、其阿曇連闕名所犯者、德史有所患時、於國造使送官物、復取湯部之馬、其介膳部臣百依所犯者、草代之物、收置於家、復取國造之馬、而換他馬來

大市連、欽明紀に見えたり〇菟礪ハ、駿河国郡名、有度と有る是なり〇涯田臣姓氏録に、岸田朝臣、武内宿祢五世孫、稲目宿祢之後也、男小祚臣、孫耳高、家居岸田村、因負岸田臣號云々、大和志山邊郡に岸田村有り、天武十三年紀に、岸田臣賜姓曰朝臣〇小緑臣、詳ならず〇丹波臣、續紀以下、丹波直の氏人數見えたり

河邊臣磐管湯麻呂、兄弟二人、亦有過也、大市連闕名所犯者、違於前詔、前詔曰、國司等莫於任所自斷民之所訴、輙違斯詔、自判菟礪人之所訴、及中臣德奴事、中臣德亦是同罪也、涯田臣闕名之過者、在於倭國、被偷官刀、是不謹也、小緑臣、丹波臣、是拙而無犯並闕名

三国ハ、越前国の地名なるを、繼體紀に見えたり

忌部木菓中臣連、正月、二人亦有
過也、羽田臣、田口臣、二人並無過、
也（闕名）平群臣（闕名）所犯者三國人、所
訴有而未問、以此觀之、紀麻利耆
拕臣、巨勢徳禰臣、穂積咋臣、汝等
三人所怠拙也、念斯違詔、豈不勞
情、夫爲君臣以牧民者、自率而正、
孰敢不直、若君或臣、不正心者、當
受其罪、追悔何及、是以凡諸國司、

感二途ハ、神祭と農月となり、原本感を減に誤れり〇大赦、爰にはじめて見えたり〇放逸ハ休めくなり〇塩屋、姓氏録に、塩屋連、武内宿祢ノ男、葛木

隨過輕重、考而罰之、又諸國造違
詔、送財於己國司、遂俱求利、恒懷
穢惡、不可不治、念雖若是、始處新
宮、將幣諸神、屬乎今歳、又於農月
不合使民、縁造新宮、固不獲已、深
感二途、大赦天下、自今以後、國司
郡司、勉之勗之、勿爲放逸、宜遣使
者、諸國流人、及獄中囚、一皆放捨、
別塩屋鯯魚、（鯯魚此云擧能之盧）神社福草、

曽都比古命之後也○神社、此氏人續紀五に、神社忌寸河内、万葉六に、神社忌寸老麿など、云人見ゆ、地名には式に、近江国淺井郡上許曽神社○朝倉君上に見えたり○椀子連ハ書に見えず○蘆尾直詳ならず、原本尾直を滅せり、釋紀に據りて補ふ、舊讀スヽキとよめるハ、理なし○屯田、垂仁紀に見えたり○吉備嶋皇祖母ハ、皇極天皇の御母にて、彼紀に注しつ○貸稲、日本靈異記に、息をイ良シト注し、天武紀に貸税を、イラシノオホチカラとよめり、是ハ人に貸して、利をとる税を云、原本貸に誤れり○脱籍ハ、定額に洩たる寺にて、平寺も民戸とおかじく、田又山等を賜ひしにや

朝倉君、椀子連、三河大伴直、蘆尾直、四人闕名並此六人奉順天皇、朕深讃美厥心、宜罷官司處處屯田、及吉備嶋皇祖母處處貸稲、以其屯田班賜群臣及伴造等、又於脱籍寺入田與山

壬午廿日○奏請、原本請を清に誤れり○混齊、神代紀に、混成とあるを、對見るべし○失業下、原本謂国業也の細字あるを、例によりて削る○天皇我皇、通證に重言如此者尊而親之也と云り○現為明神御八嶋国を、アラミカミトオホヤシマクニシロシメスとよむ

壬午、皇太子使使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下而治、及逮于今、分離失業、屬天皇我皇可牧萬民之運、天人合應、厥政惟新、是故慶之尊之、頂戴伏奏、現為明神御八嶋國天皇問於臣曰、其群臣連及伴造國造所有、昔在天皇日所置子代入部、皇子等私有御名入部、皇祖大兄御名入部、及其屯倉猶

如古代而、置以不臣、即恭承所詔、奉答而曰、天無雙日、國無二王、是故兼幷天下、可使萬民、唯天皇耳、別以入部及所封民、簡充仕丁、從前處分、自餘以外、恐私駈役、故獻入部五百二十四口、屯倉一百八十一所

甲申詔曰、朕聞西土之君、戒其民曰、古之葬者、因高爲墓、不封不樹、棺槨足以朽骨、衣衿足以朽宍、而已、故吾營此丘墟不食之地、欲使易代之後、不知其所、無藏金銀銅鐵、一以瓦器、合古塗車蒭靈之義、棺漆際會、奠三過飯、含無以珠玉、無施珠襦玉押、諸愚俗所爲也

べし、公式令詔書式の讀法なり○天皇日の、日を其日と云意に見るべし○入部の入ハ、親む詞にて、イライリイロと活かし云り、譬バ入彦入姫郎子郎女、兄母弟などの如く、御名部子代部と云べきを、親て入と云、原本細字に、謂彦人大兄也とあるを、例によりて删つ○入部ハ、上に云る如く、親む詞なれバ、遂に部名の一称となれり○五百二十四口ハ、入部を合たる惣數なり○甲申廿二日○古之葬以下、不樹以上、易繫辭の文にて、因高爲墓の四字を加たるなり○棺槨以下、愚俗所爲也以上ハ、魏志文帝紀の文なり、和名抄に棺、比止岐、槨周棺者也、於保土古と注せり、欲使易代之後、不知其所とハ、甚淺ましき謂ならんや、外夷の醜俗見るへし、文帝紀に其所を其處に作り、無藏上に、無施葦炭の四字あり、原本一下に、以字あるを衍とし削つ、漆際上に但字ありて、又押を匣に作れり○塗車ハ車形にて、是ハ土を以て其形を作れるよしなり○蒭靈ハ、神功紀に、クサヒトガタとよみ、彼處に注せり、禮檀

弓ニ、塗車芻靈、自古有之、明器之道也、大全ニ以泥為車也、束草為人形以為死者之從衞謂之芻靈○奠三過、集解に奠字を削り○飯含無以珠玉、和名抄葬送具ニ、琀玉送終口中玉也、唐書禮樂志ニ、一品至于三品、飯用粱唅用璧、四品至于五品、飯用稷唅用璧、六品至于九品、飯用粱唅用貝云々○珠襦ハ、短衣ニて腰衣なり○玉押色葉字類抄ニ、押てヨロヒと注せり、集解ニ遍躰綴珠為衣、如鎧甲、時呼為壓口衫と、盍簪録を引て記せり

又曰、葬者藏也、欲人之不得見也、廼者我民貧絕、專由營墓、爰陳其制、尊卑使別、夫王以上之墓者、其内長九尺、濶五尺、其外域方九尋、高五尋、役一千人、七日使訖、其葬時帷帳等、用白布、有轜車、上臣之墓者、其内長濶及高、皆准於上、其外域方七尋、高三尋、役五百人、五日使訖、其葬時帷帳等用白布、擔而行之、下臣之墓者、其内長濶及高、皆准於上、其外域方五尋、高二尋半、役二百五十人、三日使訖、其葬時帷帳等、用白布、亦准於上、大仁小仁之墓者、其内長九尺、高濶各四尺、不封使平、役一百人一日

葬者藏也以下、禮曲禮の文なり○王以上、中昔の制によらバ、五世王以上を云○内長ハ内深を云、按ニ此ニ帝陵の制なきハ、王以上と同制なればなり、志かるニ、先皇の御陵ハ如山如陵、甚も高大ニ作奉るべきに、如斯狹隘ニ定め給へるより、此詔行れれしニハあらねど、或ハ合葬或ハ火葬等ニ至れるもの、抑又此詔ニぞ基きけむ○帷帳、和名抄ニ、帷ハ圍也加太比良、源氏若紫ニ、御几帳のかたひら、引おろし云々、是え裏なく一重の物を垂て、隔

とするものなり、帳ハ垣代にて、今云几帳なり○轜車喪葬令に、方相轜車、義解に葬車也とあり、按に潤色ある車を云ふ、俗に織下たる儘の絹をキヌと云ひ他物ガ雜ざる蕎麥をキソバと云ふ、准へて知るべし

使訖、大禮以下小智以上之墓者、皆准大仁、役五十人一日使訖、凡王以下小智以上之墓者、宜用小石、其帷帳等宜用白布、庶人亡時、收埋於地、其帷帳等可用麁布、一日莫停、凡王以下及至庶民、不得營殯

○上臣ハ、大臣を云ふ○方七下、原本等字あるも衍れバ削る○擔而行之下、原本細字に、蓋此以肩擔輿而送之乎の、十字あり、例に違へれバ削る○下臣ハ字の如し○内長九尺、原本外長九九尺とあるハ、誤りなり今改む○大禮ハ推古紀に制し給ふ冠位十二階の中なる、第五階なり○小智ハ第十二階○一日莫停云、不得營殯など、甚く事減たる御制にて、皇国の古風此御世に一變せり歎くべし

經自殉ハ殉死なり、是ハ垂仁天皇の御世に、禁給ひしかど、猶遺れるものありしにや○殉亡人之馬ハ、其馬を以て、人に代るを云ふ○藏寶ハ、鏡劔玉の類を云ふ○斷髮ハ、今も西国東国にて、夫死れハ其妻、髮を切も常なり、かゝる惡風も、猶久

凡自殺内及諸國等、宜定一所而使收埋、不得汙穢散埋處處、凡人死亡之時、若經自殉、或絞人殉、及強殉亡人之馬、或為亡人藏寶於墓、或為亡人斷髮刺股而誄、如此舊俗一皆悉斷、或本云、無藏金銀錦綾五綵、又曰凡自諸臣及至于民、不得用金銀、縦有違詔犯所禁者、必罪其族、復有見言不見、不見

しきを知るべき○刺股ハ、此處を除て、書ニ見ず、是ハ股を刺て、殉死ニ代しゐや○見言不見云々、後世も然るをいふハ常あり、是を停め給ひしハ、善政と云べし○留買云々、古へハ家人奴婢を、賣買せしにや、戸令に凡家人所生子孫、相承為家人、皆任本主駈使、唯不得盡

言見、聞言不聞、不聞言聞、都無正語正見、巧詐者多、有奴婢欺主、貪困、自託勢家求活、勢家仍強留買、不送本主者多、復有妻妾為夫被放之日、經年之後適他、恒理、而此前夫三四年後、貪求後夫財物、為己利者甚衆、復有特勢之男、浪要他女而未納際、女自適人、其浪要者嗔、求兩家財物、為己利者甚衆、

頭駈使及責買といふ○使祓除ハ物を出して、其罪を贖はしむるを云、下是ニ准ふ○事瑕之婢、類聚名義抄ニ、瑕をサクと注し新撰字鏡ニ、讟ハ誇也痛也謂怨痛也、佐支奈牟といへる、奈牟ハ辭ニて、瑕なむなり、扱事瑕の事ハ、夫ニ嫌はれたるをいて、瑕ハ悩怨つる意なるべし、婢ハ女奴にて婢とも云へり已婦奸他原本婦字なし、集解に補へるニ從ふ、奸も諸字書ニ、カダマシとよみ、新撰字鏡ニ、

復有亡夫婦若經十年及二十年、適人為婦、并未嫁之女、始適人時、於是妬斯夫婦、使祓除多、復有為妻被嫌離者、特由慙愧所惱、強為事瑕之婢、事瑕此云居騰作柯、復有屢嫌己婦奸他、好向官司請決、假使得明三證、而倶顯陳、然後可諮、詎生浪訴、復有被役邊畔民

倭を加太牟と注せり○三證獄令に、凡告言人罪、非謀叛以上者、皆令三審○臥死路頭、民部式に、凡諸国往還百姓、若有死去者、斂埋便處、具顕貫属姓名、牓示其上、軍防令に、凡防人向防云々其身死者隨使給棺燒埋云々

事了還鄕之日、忽然得疾臥死路頭、於是路頭之家、乃謂之曰、何故使人死於余路、因留死者友伴、强使祓除、由是兄雖臥死於路、其弟不收者多、復有百姓溺死於河、逢者乃謂之曰、何故於我使遇溺人、因留溺者友伴、强使祓除、由是兄雖溺死於河、其弟不救者衆、復有被役之民、路頭炊飯、於是路頭之

借甑云々、此前後に見えたる、數條等ハ、あらかじめ、かゝる條例を、制し給ひしにてあらじ、當時然ルとのあらむを詔り出給ひしにこそ、凡祓除ハ神に告して、善に轉らしむる業なるに、爰に見えたる祓具ハ、名を假りて物を奪取しにそあらん

家、乃謂之曰、何故任情、炊飯余路、强使祓除、復有百姓、就他借甑炊飯、其甑觸物而覆、於是甑主乃使祓除、如是等類、愚俗所染、今悉除斷、勿使復為、復有百姓、臨向京日、恐所乘馬疲瘦不行、以布二尋麻二束送參河尾張兩國之人、雇令養飼、乃入于京、於還鄕日、送鍬一口、而參河人等不能養飼、翻令疲

む、眞の祓具の事も、延暦廿年五月十四日の、三代格ふ委しく見ゆたり

訓ハ、酬ふれふじ

死、若是細馬、即生貪愛、工作謾語言被偸失、若是牝馬孕於己家、便使祓除、遂奪其馬、飛聞若是、故今立制、凡養馬於路傍國者、將被雇人、審告村首、首長也方授訓物、其還鄉日不須更報、如致疲損不合得物、縱違斯詔將科重罪、罷市司要路津濟渡子之調賦、給與田地、凡始畿內及四方國、當農作月、早務

癸酉十四日

是以、原本見以ふ作れて、集解に慶長寫本ふ改たるふ從ふ

○始王之名名も、別王の御末

營田、不合使喫美物與酒、宜差清廉使者、告於畿內、其四方諸國國造等、宜擇善使、依詔催勸、秋八月庚申朔癸酉、詔曰、原夫天地陰陽不使四時相亂、惟此天地生乎萬物、萬物之內、人是最靈、最靈之間聖為人主、是以聖主天皇、則天御寓、思人獲所、暫不廢胷、而始王之名名、臣連伴造國造、分其品部、別

等を云ふ○品部ハ、白髮部、武部の類を云

殊名の名ハ、白髮部壬生部等の、部名を云、るなるべし

假借王名ハ、王名おのづから、品部となるを云ふ○襲據祖名ハ、先祖の名を姓氏に呼ふを云

彼名名、復以其民品部交雜使居國縣、遂使父子易姓、兄弟異宗、夫婦更互殊名、一家五分六割、由是爭競之訟、盈國充朝、終不見治、相亂彌盛、粵以始於今之御寓天皇、及臣連等、所有品部、宜悉皆罷、爲國家民、其假借王名、爲伴造、其襲據祖名、爲臣連、斯等深不悟情、忽聞若是所宣、當思祖名所借滅、由

○祖名所借滅ハ、假に負来たる部名も、滅むと思ふなり○以王名云々、後ながら日本後紀十四に、改紀伊国安諦郡、為在田郡、以詞渉天皇諱也、とある類なり○祖子ハ通證に蓋謂先祖也と云るに因るべし○近接於田ハ、田令に、凡給口分田、務従便近、不得隔越○調賦ハ賦

是預宣、使聽知朕所懷、王者之兒、相續御寓、信知時帝與祖皇名、不可見忘於世、而以王名輕掛川野、呼名百姓、誠可畏焉、凡王者之號、將隨日月遠流、祖子之名、可共天地長往、如是思故宣之、始於祖子奉仕卿大夫臣連伴造氏氏人等、或本云、名名王民咸可聽聞、今以汝等使仕狀者、改去舊職、新設百官、及著

位階以官位叙、今發遣國司、并彼國造可以奉聞、去年付於朝集之政者、隨前處分、以收數田、均給於民、勿生彼我、凡給田者、其百姓家、近接於田、必先於近、如此奉宣、凡調賦者可收男身調、凡仕丁者每五十戸一人、宜觀國國壃堺、或書或圖、持來奉示、國縣之名、來時將定、國國可築堤地、可穿溝所、可墾田間、均給使造、當聞解此、所宣、

九月、遣小德高向博士黑麻呂、於新羅而使貢質、遂罷任那之調、黑麻呂、更名玄理、是月、天皇御蝦蟇行宮、或本云離宮、是歳越國之鼠、晝夜相連、向東移去、

三年春正月、戊子朔壬寅、射於朝

役令に、凡調ハ絹絁絲綿布、並隨郷土所出と有り、賦ハ義解に、斂也と記せり ○男身調ハ、正丁次丁中男の調賦におのおの差あるを云 ○仕丁上に見え ○国々壃堺、是ハ諸国風土記の起る所にして、後に民部省圖帳と云る類なるべし、職原抄、民部省下に、有圖帳国郡牓示、載以明白、謂之民部省圖帳云々、今圖帳の残簡と云ものあり ○国縣之名云々、元明天皇の御世まで、傳りたる国郡の名ハ、此御世に定め給ひしものなるべし

玄理ハ、字音によむべきを、推古紀に注しつ

○蝦蟇ハ大阪上町に、高津と唱る處を云、攝津志に、王子記に作郡戸と云て、是上代の蝦蟇を、書腐したるなるを、土人も仁德天皇の坐し高津なりと誤て云へり ○晝夜、原本夜字重れるハ、一ハ刪去

壬寅十五日 ○射も射合なり、

雜令ニ凡大射者正月中旬、親王以下初位以上、皆射○壬午廿九日○惟神、此語万葉集中、云ずく見ゑたる中ニ、神随とも、神在随とも、神長柄とも、又可無奈我良とと書き、下に随在天神とも、書れる故併見て、其意を捜るに、神にして神の随にと云意なり○随神道ハ、神のなし給ふ、道のまゝにとあり○自有神道、是も上の釋ニて、惣て物ハ私意せず、神ニ任奉るぞ、真の神のみちなるべきとあり○故寄ハ、通證ニ事任也と云、ア○始治国ハ、神武紀ニ、始馭天下とも、崇神紀ニ御肇国ともいアて、彼處ニ注しつ○皇祖の字の如し、大祓ノ詞ニ、皇親神漏伎云々、此親ノ字を祝詞考等ニ、ムツとよめるハ、大祓私考ニ論ひおきつ

庭、是日高麗新羅並遣使貢獻調賦、夏四月丁巳朔壬午、詔曰、惟神（惟神者、謂随神道、亦自有神道也）我子應治故寄、是以與天地之初、君臨之國也、自始治國皇祖之時、天下大同都無彼此者也

始於神名ハ、譬ハ神名ニ、阿須波神と申して、足羽臣あア、大国主神と申して、大国忌寸あるが如し○天皇名ハ、泊瀬部天皇と申て、長谷部造あアて、息長足日天皇ありて、息長連あるが如し○執彼此ハ、神名王名を、己が氏とし、是ニ由を作て、其姓を尊す、是守名名なり○

既而頃者、始於神名天皇名名、或別為臣連之氏、或別為造等之色、由是率土民心、固執彼此、深生我汝、各守名名、又拙弱臣連、伴造國造、以彼為姓、神名王名、逐自心之所歸、妄付前前處處、（前前、猶謂人人也）爰以神名王名、為人賂物之故、入他奴婢、穢汗清名、遂即民心不整、國政難治

前々ゟ、人々を當時の俗ニ、然書あらひけむを、其儘ニ書續て、注を加へたるニや、其ハ心の依方の人々、處々を氏ニせしとなり○人賂物ハ、其ニ關る人、賄賂を貪取て、神名王名を以て、奴婢の名ニさへ為となり

聖化、御赴ニて善方ニ赴りしむるが云、源氏總角ニ、御れもむけニ去たがひ、きさ疋ずなり云々○庸調、上ニ注せり○小郡ハ、攝津国西成郡に在る事ハ、敏達紀ニ注せり○禮法、按ニ皇国ニて禮と云へるハ、表

是故、今者隨在天神、屬可治平之運、使悟斯等而治國治民、是先是後、今日明日、次而續詔、然素頼天皇聖化而習舊俗之民、未詔之間、必當難待、故始於皇子群臣及諸百姓、將賜庸調、是歳壞小郡營宮、天皇處小郡宮而定禮法、

を取り繕ふものふあらず、故ふ字書ふ禮をヰヤとも、ウヤとも訓み、是ふマフてふ辞を加へて、ウヤマフと云ひ、即身を折屈めて、慎む業なれバ、字鏡集類聚名義抄等に、ヰガムの訓あり、今昔物語四ふ、国王ヨリ始テ、此ヲ聞テ貴ミ禮ム事无限とあり、故ふ神功紀ふ拜禮雄略紀ふ跪禮等をヰヤマフとよめり支那書ふ儀禮と云ふ書あり、惣て虚餝を以て、作り立たる禮ありしを、此御代の程より用ひ、虚禮を尊むやうなまり、然バ禮法ハ法式と為ざれバ、吾古へふ叶ひがたし

廳ハ、和名抄ふ萬豆利古止止乃と注せり、政殿なり○入侍、下原本臨臨とあり一ハ、衍なれハ削る○聽鍾而罷、公式令ふ凡京官皆開門前上り、閉門後下る、義解ふ謂第二開門鼓前、退

其制曰、凡有位者、要於寅時南門之外、左右羅列、候日初出、就庭再拜、乃侍于廳、若晩參者、不得入侍、臨到午時、聽鍾而罷、其擊鍾吏者、垂赤巾於前、其鍾臺者、起於中庭、工人大山位倭漢直荒田井比羅

朝鼓後也○撃鍾、職員令陰陽寮下守辰丁二十人、掌伺漏尅之節、以時撃鍾鼓○赤中字の如し、和名抄に、幗覆髪上者也、和名知岐利加宇不利今老嫗戴之○大山位は、次の五年紀に定めたる冠位なるを、爰に記せるは、上に廻らしたるなり○倭漢直は、名を漏せり、是は上に倭漢文直麻呂と云る人なり○荒田井比羅夫、是は下に荒田井直比羅夫と何て

夫、誤穿溝瀆、控引難波而、改穿疲労百姓、爰有上疏諫者、天皇詔曰、妄聽比羅夫所詐而、空穿瀆、朕之過也、即日罷役、

甲子十一日○有間は、攝津国の郡名なると既に注つ、温湯は舒明紀に見ゑたり○武庫、神

冬十月、甲寅朔甲子、天皇幸有間温湯、左右大臣群卿大夫從焉、十二月、晦、天皇還自温湯而、停武庫

功紀に、務古に作て、彼處に注せり、攝津志に古蹟在武庫郡藏人村、と記せて○行宮下、原本細字に、武庫地名也の五字ありて、武庫も應神紀に、二所まで出たるを、忘れたる後人の、攙入なれば削る

行宮、是日災皇太子宮、時人大驚恠、

七色一十三階之冠、推古十一年の紀に、十二階の冠位を、制つて、後世位記を賜ふを、古へは冠をたまひしなり○織冠字の如し、織物にて文あるを、名とせり○縁、新撰字鏡に、縁毛止

是歳、制七色一十三階之冠、一曰織冠、有大小二階、以織為之、以繍裁冠之縁、服色並用深紫、二曰繍冠、有大小二階、以繍為之、其冠之縁服色並同織冠、三曰紫冠、有大小二階、以紫為之、以織裁冠之縁、

保利と注し、和名抄に旋子てよめり、廻る意なり○深紫は濃紫にて、略コムラサキと云り○繍冠、和名抄に、繍以五色絲刺萬物形状也、訓沼無毛乃とあり、縫物の轉なり○紫冠は、紫地の綾なるべし○浅紫字の如く、薄紫とよむべし○錦冠字の如し○大伯仙は、錦の別名にて、初學記に、錦有大博山小博山、卓氏藻林に、博山爐烟象海中博山、故名とあり、錦文に加ふる名も、今は絶て聞えず○真緋字書に緋絳色、

服色用浅紫、四曰錦冠、有大小二階、其大錦冠、以大伯仙錦為之、以織裁冠之縁、其小錦冠、以小伯仙錦為之、以大伯仙錦裁冠之縁、服色並用真緋、五曰青冠、以青絹為之、有大小二階、其大青冠、以大伯仙錦裁冠之

赤練と注せり、原本真を直に作れり、通證に改たるに從ふ○紺は深縹なり、但持統紀に、深縹ともよめり、何も雅言なり○車形錦、續古今集に、小車のにしきは紐をときかけて、とあるも車形の文なるを云○菱形錦、字の如し○建武、晉書輿服志に、武冠一名武弁、一名建冠とあるを、取合せたる名か○立身、五年紀第十九階には、立身を本名とせり、初位は身を立つるの、初めなればなるべし○鐙冠、通證に壒嚢抄を引て、曰

縁、其小青冠、以小伯仙錦裁冠之縁、服色並用紺、六曰黒冠、有大小二階、其大黒冠、以車形錦裁冠之縁、其小黒冠、以菱形錦裁冠之縁、服色並用緑、七曰建武(初位、又名立身)以黒絹為之、以絹裁冠之縁、別有鐙冠、以黒絹為之、其冠之背、

張漆羅、以縁與鈿、異其高下、形似

本乃冠波、偏尓蟬乃羽尓象例利、壺冠登云倍利、當世尓用留冠是也登、江師記尓侍利云々、是ハ形の壺みたるを云るなるべし、鐙字を訓る義ハ志らず○鈿字書に、金華也と注せ

蟬、小錦冠以上之鈿、雜金銀為之、大小青冠之鈿、以銀為之、大小黒冠之鈿、以銅為之、建武之冠、無鈿也、此冠者大會饗客、四月七月齋時、所着焉

り、古字書に、カムザシと注し、即挿頭にて、記に天ノ宇受賣を、此紀に鈿女に作をれバ、推古紀に見えたる髻華とおなじく、鈿をウズとよむべきとも知るべし○蟬ハ、セミとよむべし、カザリクシとよめるハ、餝串にて、蟬を餝とせしにや、是ハ支那国のを、真似びたるなり○大會ハ、儀式の行はるゝ日を云フ○饗客ハ、蕃客を饗し給ふ日○四月七月齋時、推古紀に、四月八日、七月十五日、設齋とあり

新羅遣上臣、大阿飡金春秋等、送博士小德、高向黒麻呂、小山中中臣連押熊、來獻孔雀一隻、鸚鵡一隻、仍以春秋為質、春秋美姿顏、善談咲、造渟足柵、置柵戸、老人等相謂之曰、數年鼠向東行、此造柵之兆乎

大阿飡ハ、新羅官十七等の中にて、第五等に當れり、原本飡を浪に誤まり、東國通鑑に據りて改む○金春秋、東国通鑑、新羅善德女王、十一年ノ條に、新羅遣伊飡金春秋、乞師於高句麗云々、同新羅太宗八年ノ條に、新羅王金春秋薨、壽五十九とある年ハ、我齊明天皇九年に當まり、金ハ彼国王ガ姓なり、齊明紀に、日本世記を引て、春秋智に作れり○小德ハ、推古天皇十一年に制し給ふ、十七等の冠位なるを、此に記せるハ不審○鸚鵡、和名抄に、山海經を引て、青羽赤喙能言、名曰鸚䳇とありて、訓を洩せり、本草綱目の訓注に、モノイ

ヒトリと注し、大和本草に、鸚鵡ハ人言ヲ不學モ多シ、中夏ノ南方近海處、及南蠻ニ多シ、彼地以鸚鵡為鮓、以孔雀為腊、皆以其易得也云々○談咲、新撰字鏡に、喙、誇語也、伊豆波留、又保太支天云○渟足、和名抄に、越後国郡名、沼垂、奴多利とあり、此地のこと、齊明紀にも見ゑたり○柵戸、字書に柵、編竪木也と注せり、即城にて其に偽たる民を、柵戸と云○豊碕宮、原本豊字を落せり○原本於三韓の三字、朝字ノ下に在り、今集解に改たるに従ふ○己未、原本未を來に誤れり、今類聚国史に據りて改む○阿倍大臣は、倉梯麻呂を云○

四年春正月壬午朔、賀正焉、是夕天皇幸于難波豊碕宮、二月壬子朔、遣學問僧於三韓、己未、阿倍大臣、請四衆於四天王寺、迎佛像四軀、使坐于塔内、造靈鷲山像、累積鼓為之、夏四月辛亥朔、罷古冠、左右大臣猶著古冠、是歳新羅遣使

四衆は、比丘比丘尼、優婆塞優婆夷を云○靈鷲山、西域記に、耆闍崛山、有兩峰雙立、鷲鳥常居其嶺、山遠望如鷲形、故為靈鷲山云々、中むらしの歌に、此山をわしの山とよめり○古冠は、上に見ゑたる、七色十三階の冠なり○左右大臣、公卿補任に、左大臣阿倍倉橋麻呂、右大臣蘇我山田石河麻呂○磐舟は、越後国の郡名なり

大紫小紫以上は、上に見えし、華は此にて新制、立身は上の建武の一名なり○八省は中務式部治部民部兵部刑部大藏宮内を云、此らの面影は、早くよ

貢調、治磐舟柵、以備蝦夷、遂選越與信濃之民、始置柵戸、五年春正月丙午朔、賀正焉、二月制冠十九階、一曰大織、二曰小織、三曰大繡、四曰小繡、五曰大紫、六曰小紫、七曰大華上、八曰大華下、九曰小華上、十曰小華下、十一曰

ゑ見ゑたれど、正しく八ッに定たるハ、此御世ぞ始ありけむ、然るに職原抄、大藏省、下に、本朝別置當省、不叶異朝之准據者也、と記せるハ、支那書周禮に、六官を作る、是を天地春夏秋冬に配たるを、我八省ハ彼に衛えずとして、是支那風に諂たるなゑ、彼撰者ハ南朝にハ、無双の忠臣なりしかど、古へを思ふとの蹤かゑしぞかし、省ハ字書に禁署也と注せり○百官、崇神紀、頭宗紀等に百僚と作ゑ

大山上、十二曰大山下、十三曰小山上、十四曰小山下、十五曰大乙上、十六曰大乙下、十七曰小乙上、十八曰小乙下、十九曰立身、是月詔博士高向玄理與釋僧旻、置八省百官、

辛酉十七日○朱雀門ハ、拾芥抄に、伴氏造之、二階中間戸五間、號朱雀御門、又曰朱雀門、長安南面皇城門、是謂朱雀門、又大明宮南面五門、正面曰丹鳳門、夫丹鳳朱雀其義一く、然則以其在南方、故謂之朱雀門云々、なほ朱雀門の事ハ、三代實録二十にも、見ゑたり○戊辰廿四日○身刺、原本身判に作れり、今釋紀に從ふ○譖、新撰字鏡に、譖志己豆と注せり、醜つの意なり○異母兄、新撰字鏡に、庶兄ハ万々兄○麻呂ハ、倉山田麻呂を

三月乙巳朔辛酉、阿倍大臣薨、天皇幸朱雀門、舉哀而慟、皇祖母尊皇太子等、及諸公卿、悉隨哀哭、戊辰蘇我臣日向、（日向字身刺）譖倉山田大臣於皇太子曰、僕之異母兄麻呂、伺皇太子遊於海濱、而將害之、將反其不久、皇太子信之、天皇使大伴狛連、三國麻呂公、穗積嚙臣於蘇我倉山田麻呂所、而、

云ふ○法師ハ名なり○更名奏ヘ、マヲスとよむべし○茅渟道ハ、和泉の地名にて道とハ大坂天王寺ゟて、阿部野道を南に行き茅渟ゟて東南紀見峠を越て、大和に赴きしにや○興志ハ、コゴシとよむべし、神代紀の神名、興台に許語等の、訓注あるを見るべし○山田、

問反之虚實、大臣答曰、被問之報、僕面當陳天皇之所、天皇更遣三國麻呂公、穗積囓臣、審其反狀、麻呂大臣、亦如前答、天皇乃將興軍、圍大臣宅、大臣乃將二子法師與赤狛、更名奏、自茅渟道、逃向於倭國境、大臣長子興志、先是在倭、（謂在山田）營造其寺、今忽聞父逃來之事、迎於今來大槻、近就前行入寺、顧

大和国十市郡に、山田村あて○其寺ハ、山田寺を云ふ○今來ハ吉野郡にて、欽明紀に注せて○大槻ハ、雄略紀に、新漢槻本とある處を云へるか○己巳廿五日○夫原本、大に誤れり○黄泉ハ神代紀に、委く弁へおけて、此處ハ姑く黄泉とよむべし、万葉五に、和可家禮婆、道行之良士、末比波世武、之多敝

謂大臣曰、興志請自直進、逆拒來軍、大臣不許焉、是夜興志、意欲燒宮、猶聚士卒、（宮謂小墾田宮）

己巳、大臣謂長子興志曰、汝愛身乎、興志對曰不愛也、大臣仍陳說於山田寺衆僧、及長子興志、與數十人曰、夫爲人臣者、安構逆於君、何失孝於父、凡此伽藍者、元非自

乃使於比弖登保良世と伝ヘ、身、故造、奉爲天皇誓作、今我見譖

即裏邉ふて、其事式の鎮火祭、身刺、而恐横誅、聊望黄泉、尚懐忠

詞ふ下津國とある條の、辨蒙ふ注したとバ披見るべし、凡退、所以來寺、使易終時、言畢開佛

人の死て後の事をバ魂の由殿之戸、作發誓曰、願我生生世世

久問と云書ふ、記しおれバ、不怨君王、誓訖、自經而死、妻子殉

爰にい云ず○八人、原本人字死者八人、是日、以大伴狛連與蘓

を脱せり、今一本ふ據る○黒我日向臣、臣、爲將領衆、使追大臣、將

山、和名抄河内国丹比郡郷名軍大伴連等、及到黒山、土師連身、

采女臣使主麻呂、從山田寺馳來

黒山、志ふ丹南郡ふ黒山村あ告曰、蘓我大臣、既與三男一女、倶

て○身ハ一言の名なり、天智自經死、由是將軍等、從丹比坂歸

紀ふ小竹田史身と、云も見ゆ、雄略紀ふ、物部目大連など、併見るべし○山田寺

も、十市郡山田村ふあり、此寺ハ石河麻呂之長子、興志建之と、扶桑略記ふ記せ

るを、色葉字類抄ふ引ろて、續紀一ふ、施山田寺封三百戸、限三十

年、大和志ふ、山田寺一名華嚴寺○丹比坂ハ、河内国丹南郡ふ在り

庚午廿六日○著枷、和名抄ふ、庚午、山田大臣之妻子、及隨身者

無鉗者著盤枷、日本紀私記云自經死者衆、穂積臣嚙、捉聚大臣

久比加之○反縛ハ、後手ふ縛ル伴黨、田口臣筑紫等、著枷反縛、是

之、南史齊紀ふ、向後總而結之、夕木臣麻呂、蘓我臣日向、穂積臣

名曰反縛○木臣ハ紀臣なり嚙、以軍圍寺、喚物部二田造塩、使

○物部雄略紀
ニ、物部兵士三十人と、ゐる處
に注せり、舊事
斬大臣之頭、於是二田塩仍抜大
刀刺擧其宍叱咤啼叫、而始斬之
紀ニ、天物部等二十五部、同帶兵杖天降供奉○二田造、姓氏録ニ、二田物部、神饒
速日命、天降之時從者、二田天物部之後者、舊事紀ニ五部造、一曰二田造云々、和
泉志ニ、泉南郡二田村ゐて○叱咤、漢書王吉傳ニ、口倨手叱咤云々、是ハ四字引
合て、オラビサケビとよむべし、原本叱を吒ニ誤れて○始、字鏡集和玉篇等ニ、
始字をイマシと注せり、神功紀ニ、乃今醒之曰云々、万葉七ニ、今數者、見目屋跡
念之、三芳野之、大川余杼乎、今日見鶴鴨など併思ニ、キハ助辞ニて、始と云意な
るを、略解ニイマシキとよみて、今と云意ニ解けるハ
非なり、續紀廿五ニ、今乃之紀間方云々、とゐスもおなじ
甲戌三十日○
耳梨も、大和国
甲戌、坐蘇我山田大臣而、被戮者、
十市郡の地名
○高田、姓氏録
田口臣筑紫、耳梨道德、高田醜此云
ニ、高田首、高麗之
国人、多高子使渠
雄、額田部湯坐連、名闕秦吾寺等、

主之後也とゐ
ア、此地名數所
凡十四人、被絞者九人、被流者十
ニあれバ、何處
とも定メがさし
五人、是月遣使者、收山田大臣資
○額田部湯坐
連も、姓氏録ニ、
財、資財之中、於好書上題皇太子
天津彦根命子、
明立天御影命
書、於重寶上、題皇太子物、使者還
之後也云々、舊
事紀ニ、天斗麻
申所收之狀、皇太子始知大臣心
祢命、額田部湯
坐連等祖とゐ
猶貞淨、追生悔恥、哀歎難休、即拜
ア○被絞、賊盗
律ニ、謀大逆者
日向臣於筑紫太宰帥、世人相謂
絞○被流、賊盗
律ニ、凡謀反及
之曰、是隱流乎
大逆者皆斬、祖孫兄弟皆配遠流○收資財、賊盗律ニ、謀反及大逆者云々、資財田
宅並沒官○太宰帥、和名抄ニ、太宰府於保美古止毛知乃司、帥加美、職員令ニ、帥

一人掌祠社戸口簿帳、字養百姓、勸課農桑云々、蕃客歸化饗讌事、職原抄に、爲大臣之人左遷之時、任權帥、然而不得知府務○隱流、通證に陽進拜而、陰退遷之也と云へるが如し、中昔より權帥に、左遷せらるも多し、此日向を權輿とす

痛惋、字書に惋ハ駭恨也、と注せて、舊讀ツカフとあるハ、アツカフの略にて、継體紀に、惋痛雄略紀に、駭惋などあり、柴花物語音樂に、心くるしう、あつかえしげなり

皇太子妃、蘇我造媛、聞父大臣爲塩所斬、傷心痛惋、惡聞塩名、所以近侍於造媛者、名稱塩名、改曰堅塩、造媛遂因傷心、而致死焉、皇太子聞造媛徂逝、愴然傷怛、哀泣極甚

○悪聞塩名、齋宮式に、内外の忌詞あるも、同例あり○堅塩、欽明紀に、岐拖志の訓注あり、和訓栞に、かたしほの轉にや、といへり

野中ハ地名なり、和名抄河内国丹比郡郷名野中、乃奈加、志ふ野中村あり○川原史、姓氏録に、河原連、陳思王植之後也、續紀九に、河内国丹比郡人、正六位下川原椋人子虫等、四十六人賜河原史姓○耶麻鱙播爾ハ、山川になり○烏志賦拖都威底ハ、鴛鴦二居而にて、皇太子と造媛とに、喩たり○陀虞毗預俱ハ、耦善なり○陀虞陛屢伊慕乎ハ、所耦妹を之○多例柯威爾雞武ハ、誰將率にて、歌意隱されたる處なく、一首ならてあり

於是野中川原史滿、進而奉歌、歌曰、耶麻鱙播爾、烏志賦拖都威底、陀虞毗預俱、陀虞陛屢伊慕乎、多例柯威爾雞武、其一

摸騰渠等爾も、本異にて、本とハ本を云、古今六帖に、出て見る、むかひの岡の、もとしけ

摸騰渠等爾、婆那播左該騰摸、那爾騰柯母、于都俱之伊母我、磨陀左枳涅渠農、其二

み咲たる花の、ならずハやはゞ、扨皇太子と、造媛とハ、人も別なるてふ意で、本に喩たり、是を毎本と解くるハ非なり、渠字ハ清音なるをや○婆那播左該騰摸ハ、花者雖開にて、造媛が愛く、世に在る状を云へり○那爾騰柯母も、何とかにて、俗にどうしてもの意なり、母ハ加ふるを○于都俱之伊母我ハ、愛妹之なり、是を愛き妹といへるにて、キを略き云るハ、新撰字鏡に、娃ハ宇豆久志乎美奈、万葉四に、愛夫、同十三に、愛妻など多かり、是古言の一格なり○磨陀左枳涅渠農ハ、不復幸出來まで、幸ハ上に、花者開とある花を受て、開を兼て藾主せぬを云へり、此涅を而にして解くるも非なり、涅ハ清音に用たる例なきをや、万葉二十に、奈爾須禮曽波波登布波奈乃、佐吉低已受祁牟、一本に低を泥に作れゝバ、此とれなじく、幸出來ざらむなり、一首の意ハ、立並たる人ハ別なれど、おなじ状に美きを、いかなをべか、其妻のみ花の如くならで、咲出來ぬをざるとなり

裘、通證に蒲簀也、編蒲為袋也と云へり○乙亥、原本乙卯に作まり、今長暦に據りて改む○甲

皇太子慨然頽歎褒美、曰善矣悲矣、乃授御琴而使唱、賜絹四匹、布二十端、綿二裘、夏四月乙亥朔甲

午廿日○長徳連下、原本細字に、字馬飼とあて、前紀に既見ゑ、これも削る○掃部連、姓氏録に、掃守連、振魂命四世孫、天忍人命之後也、舊事紀に、前玉命、掃部連等祖とあて、是もカモンとよめるハ、轉略にて、蟹守より起れる由、古語拾遺に見ゑたり、天武十三年紀に、掃部連賜姓曰宿祢○沙喙部、推古紀に見ゑたり○沙飡ハ、新羅官十七等の中、第八等に當れて、原本飡を食に作まり、東国通鑑に

午於小紫巨勢徳陀古臣、授大紫為左大臣、於小紫大伴長徳連、授大紫為右大臣、五月癸卯朔、遣小華下三輪君色夫、大山上掃部連角麻呂等、於新羅、是歳新羅王、遣沙喙部沙飡金多遂為質、從者三十人 僧一人、侍郎二人、丞一人、達官郎一人、中客五人、才伎十人、譯語一人、雜傔人十六人、并三十七人也

據て改む○侍郎、後漢書百官志ニ、侍郎三十六人、四百石となり○丞原本、承ニ作れり、集解ニ改たるニ從ふ○達官、禮ノ檀弓ニ、公之喪、諸達官之長杖、大全ニ受命於君者、其名名幸於上、故謂之達官○十六人、原本人字を脫せり、今一本ニ據る

白雉元年、春正月辛丑朔、車駕幸味經宮、觀賀正禮。味經、此云阿膩賦。是日車駕還宮。二月庚午朔戊寅、穴戶國司草壁連醜經、獻白雉曰、國造首之同族贄、正月九日、於麻山獲焉。

味經宮、和名抄ニ、攝津国東生郡郷名味原、万葉六ニ、奥鳥味經乃原爾とも、御食向味原宮とものあ、按ニ高津宮の一名ニや、下ニ大郡宮とかるも同地ならむ○戊寅九日○草壁連、姓氏録ニ、日下部連、彦坐命子、狹穗彦命之後也、天武十三年紀ニ、草壁連賜姓曰宿祢○白雉、推古七年紀ニ、百濟貢駱駝云々、白雉一隻とあれど、皇国にして獲しれ、此時ぞ始なる○国造首、国造本紀ニ、穴門国造、纏向日代朝御世、櫻井田部連同祖、迩伎都美命四世孫、速都鳥命定賜国造とあり、此ニ首とあるも、国造の名なるべし○麻山詳ならず

於是問諸百濟君曰、後漢明帝永平十一年、白雉所在見焉、云云。又問沙門等、沙門對曰、耳所未聞、目所未覩、宜赦天下使悅民心。道登法師曰、昔高麗欲營伽藍、無地不覽、便於一所、白鹿徐行、遂於此地營造伽藍、名白鹿薗寺、住持佛法。

後漢明帝永平云々、此事後漢書明帝紀ニ見えたり、原書所在を在所ニ作れり、後漢書ニ據て改む○所未を、原本ニ未所ニ作れり、類聚国史ニよりて改む○道登上ニ見えたり、扶桑略記大化二年條ニ、始造

宇治橋件北岸石銘曰世有釋子名曰道登件道登者本是高麗學
生元興寺沙門也云々○白鹿薗寺祖庭字苑ニ鹿苑所以養禽獸

三足烏ハ治部式上瑞ニ見ヘたり淮南子精神訓ニ日中有踆烏注ニ謂三足烏○王者祭祀以下孝經援神契の語なり○周成王上原本又字充類聚国史に據りて補ふ○成王ハ武王の子ニて名は誦と云此件の事ハ韓氏外傳及論衡等ニ

又白雀見于一寺田莊國人僉曰
休祥又遣唐國使者持死三足烏
來國人亦曰休祥斯等雖微尚謂
祥物況復白雉僧旻法師曰此謂
休祥足爲希物伏聞王者旁流四
表則白雉見又王者祭祀不相踰
宴食衣服有節則至又王者清素
則山出白雉又王者仁聖則見又

見ヘたり○越裳氏後漢書南蠻傳ニ交阯之南有越裳国云々○黄耇ハ老人なり儀禮士冠禮ニ黄耇無疆受天之慶注ニ黄黄髮也耇凍黎也皆壽徵也○烈風原本別風ニ作きり今類聚国史ニ據りて改む○淫雨ハ氷雨なり○甲申十五日○隊仗宮衛令儀仗軍器の義

周成王時越裳氏來獻白雉曰吾
聞國之黄耇曰久矣無烈風淫雨
江海不波溢三年於茲矣意中國
有聖人乎盍往朝之故重三譯而
至又晉武帝咸寧元年見松滋是
則休祥可赦天下是以白雉使放
于園甲申朝庭隊仗如元會儀左
右大臣百官人等爲四列於紫門
外以粟田臣飯虫等四人使執雉

解に、用之禮容為儀仗用之征伐為軍器、即同實而殊号○元會儀、宮衛令に、凡元日朔日若有聚會及蕃客宴會辞見、皆立儀仗○紫門ハ、紫宮の門と云意○塞城、皇極紀に塞上に作まり○忠勝、齊明紀に、王子豐璋與其叔父忠勝等云々○侍醫ハ御許藥師なるべし、職原抄典藥寮に侍醫又權見ゆ○猪名公宣化紀に、偉那公なりて、彼處に注しつ○岐太ハ、紀氏の人にやと思へど四人と云ふに稱ず、上の侍學士に名を闕ぐり、通證に岐太二字、疑當入于此と云へり、然もありげなり伊勢王詳ならず、齊明六年紀

輿而在前去、左右大臣、乃率百官及百濟、君豐璋、其弟塞城忠勝、高麗侍醫毛治、新羅侍學士等、而至中庭、使三國公麻呂、猪名公高見、三輪君甕穗、紀臣乎麻呂、岐太四人代執雉輿、而進殿前、時左右大臣就執輿前頭、伊勢王、

に、伊勢王甍と記し、天智七年紀にも甍と記せれど、いよ〱いぶかし○倉臣ハ、姓氏録に、椋連見えたり、然らバ火明命男天香山命之後也となり、又續紀以後、内藏忌寸内藏宿祢の、氏人見えたるハ後漢靈帝より出と、續後紀一内藏忌寸秀嗣、同八、内藏宿祢高守等の

三國公麻呂、倉臣小屎、執輿後頭、置於御座之前、天皇即召皇太子、共執而觀、皇太子退而再拜、使巨勢大臣奉賀曰、公卿百官人等奉賀、陛下以清平德治天下之故、爰有白雉自西方出、乃是陛下及至千秋萬歲、清治四方、大八嶋、公卿百官及諸百姓等、冀罄忠誠勤將事、奉賀訖再拜

傳に見えたれバ別なり、天武十三年紀に倉連賜姓曰宿祢○御座、字の如し、源氏帚木に、もしつ方のおましに、かりなるやうにて、大とのおもれり、晋書庾亮傳に、引亮升御座○巨勢大臣ハ、德太を云○奉賀ハ善言にて、天智紀に賀正事、出雲風土記に、国造神吉詞奏など見由○清治、原本浄侶に作れり、今類聚国史に據りて改む○

詔曰、聖王出世治天下、時天則應之、示其祥瑞、曩者西土之君、周成王世、與後漢明帝時、白雉爰見、我日本國、譽田天皇之世、白鳥樔宮、大鷦鷯帝之時、龍馬西見、是以自古迄今、祥瑞時見、以應有德、其類多矣、所謂鳳凰、騏驎、白雉、白鳥、若斯鳥獸、及于草木、有符應者、皆是天地所生、休祥嘉瑞也

祥瑞、神代紀に、瑞此云弥図と注し、水穂水垣水山などの水も、みづくしと美たるにて、惣て同義なり○後漢、原本後字を落せり、類聚国史に據りて補ふ○白鳥ハ、史に洩て傳もらず、集解に鳥ハ鳥の誤と云へるハ然り、白鳥にあらざれバ、瑞さしがたし、治部式に白鳥ハ、中瑞に見えたり○龍馬も史に洩たり、治部式に、龍馬を上瑞に出し、夫木集廿七に、山高み石ふむみちの、もるけさに、たつの馬をも、今えてしかな、宋書符瑞志に、龍馬者仁馬也、河水之精、高八尺五寸、長頸有翼傍有垂毛、鳴聲九哀○鳳凰、枕草紙三に、桐のはな、むらさきに咲たるハ云々、もろこしにことごとしく、名つけたる鳥の、これにしもをむらんとなりて、音讀の外本名を聞かず、此鳥を桐にとりなもせ云へるハ、詩大雅に鳳凰鳴矣、梧桐生矣と云、晋書符堅記、北史高陽王雍傳等に非梧桐不栖、非竹實不食などの、蛇足を加ふるなり、山海經に、其狀如雞、五采而文、名曰鳳皇、宋書符瑞志に、鳳凰者仁鳥也云々、雄曰鳳雌曰凰、蛇頭亀背、鷺腹鶴頸、鶏喙鴻前、魚尾云々、其鳴雄曰節々、雌曰足々、晨鳴曰發明、晝鳴曰上朔、夕鳴曰歸昌云々、猶韓詩外傳八にも、かゝる怪事を云り、凡支那人の虚誕、百事に一實なきを、治部式にも諾て、大瑞に納れ、鳳狀如鶴、五綵以文、鷄冠燕喙、蛇頭龍形と記せり、年治按に、鳳凰と云るハ、雉の一名なるべし、然も扶桑略記、天武二年條に備後国進白雉、仍改為白鳳元年とある或、證とすべし○麒麟、天武紀に、有人得麒角於葛城山、角本ハ二枝而末合有宍、治部式大瑞條

に麟、仁獣也、麕身牛頭牛尾一角、端有肉云々、此外爾雅釋獸をはじめ、何くれに見えたる、麟も鳳もむかしありけむ、鶏のたぐひにて、素より无を作り出たるなきべ、信べからねば、近年西洋より一種の山獸を渡し来て、是を麒麟と号け、東京にて観物にせし由なり、其状大り鹿むかありて、肉角ありと云り、是真の麒麟なるべし〇神祖、古語拾遺に、高皇産靈神為皇親神留伎命、次神皇産靈神為皇親神留彌命、常陸風土記諸祖天神の注に、俗曰謂賀味魯彌賀味魯岐、大祓詞に皇親神漏岐神漏美乃命以て等、併按に、神ろ君神ろ女の轉に

夫明聖之君、獲斯祥瑞、適其宜也、朕惟虚薄、何以享斯、蓋此専由扶翼、公卿臣連伴造國造等、各盡丹誠、奉遵制度之所致也、是故始於公卿、及百官等、以清白意、敬奉神祇、並受休祥、令榮天下、又詔曰、四方諸國郡等、由天委付之故、朕摠

て、男女の稱なり〇放鷹云々、鷹を養ふとは、仁徳紀に見え初て、其後見えざるは、序なくして滅たるなり、職員令に、主鷹司ありて、鷹戸も見ゆ、此鷹を放つを禁じ給いしも、かゝる瑞鳥の栖めればなり〇境堺、原本堺字を落せり、今類聚国史に従ふ〇大山は、上に見えたる、第十一二等の冠にて、上下あり〇給祿、原本に給各有差に作り、今類聚国史に據りて改む〇調役、賦役令に、應輸国役者、隨事斟量、是は上にも注せる如く、正丁次丁中男、其郷土より産す物を、納むるを云ふ、役は同書の義解に、使也、歳役雑徭等、為役也とありて、復は字書に除也と注せり

臨而御寓、今我親神祖之所知、穴戸國中、有此嘉瑞、所以大赦天下、改元白雉、仍禁放鷹於穴戸境堺、賜公卿大夫以下、至于令史、各有差、於是褒美國司草壁連醜經、授大山并大給祿、復穴戸三年調役、

夏四月、新羅遣使貢調。（或本云、是天皇之世、高麗百濟新羅三國、毎年遣使貢獻也）冬十月、爲入宮地所壊丘墓、及被遷人者、賜物各有差。即遣將作大匠荒田井直比羅夫、立宮堺標。

天皇下、原本之世の二字を脱せり、集解に補へるに従ふ○所壊丘墓ハ、新都の邊りにある、墓を壊りて、他に移したるを云○將作大匠、和名抄に、木工寮ハ古多久美乃豆加佐、雄略紀に、木工闘鶏御田など見ゆ、後漢書百官志に、將作大匠一人二千石、宋書百官志に、將作大匠一人丞一人、掌土木之役云々○堺標、欽明紀に立標而合戦、續紀廿二に、限伊勢大神之界樹標、万葉二に、道之阿囘爾標結吾勢、字書に標ハ表也と注せり○侠侍ハ、用明紀に注しつ○八部飜譯名義集に、一ハ天、二ハ龍、三ハ夜叉、四ハ乾闥婆、五ハ阿脩羅、六ハ迦樓羅、七ハ緊那羅、八ハ摩睺羅伽云々○四十六像詳ならず、一本に六を三に作れり、今強て按に若ハ今年天皇の御年の數か○漢山口直、姓氏録に、山口宿祢ハ後漢靈帝四世孫、都黄直之後也、續後紀十七に、山口忌寸與道と云人ありて、後漢靈帝曽孫阿知王苗裔也と記せり○倭漢直ハ、皇極紀に、漢書直に作れり○白髮部連、繼體紀に、毎州安置三種白髮部云々、氏人ハ日本靈異記に、白髮部猪麻呂者、備中国少田郡人也とあり、天武十二年紀に、白髮部造賜姓曰連、續紀三十八に、臣子之禮必避君諱、比者先帝御名及朕之諱、公私觸犯不忍聞、自今以後宜並改避、於是改姓白髮部為真髮部云々、是より先き同書二十七に、今良大目東人子秋麻呂等六十八人賜姓檜前若櫻部津守部真髮部云々とありて、姓氏録には、皇別神別共に載されバ、姓祖詳ならず

是月、始造丈六繡像、侠侍八部等四十六像。是歳漢山口直大口奉詔刻千佛像、遣倭漢直縣、白髮部連鐙、難波吉士胡床、於安藝國、使造百濟舶二隻。

丁未十四日○戊申十五日○

二年春三月、甲午朔丁未、丈六繡

十師、上に見ゆ
さり○一切経
天武紀に、寫一切經於川原寺、
續紀廿八に、秦
忌寸智麻呂、為
寫一切經次長
○安宅土側等
經、未考ず○著
唐国服云々、按
に此時專唐の
制度に倣ふ世
にきら、外国の
衣服に易るを
尤悪ミ給ひしか、
素より然べき
理あり、抑他国
に臣從し、服色

像等成、戊申、皇祖母尊請十師等、設齋、六月百濟新羅、遣使貢調獻物、冬十二月晦、於味經宮、請二千一百餘、僧尼、使讀一切經、是夕燃二千七百餘燈、於朝庭内、使讀安宅土側等、經、於是天皇從於大郡、遷居新宮、號曰難波長柄豐碕宮、是歲新羅貢調、使知万沙飡等、著唐國服、泊于筑紫、朝庭惡恣移俗、

を奉まるハ、国
辱の甚しきに
て、誰かハ是を
耻ざらむ

是月も二月に
て、集解に二月
に改メされど、次
に三月とあるを
ば改メずとも然
聞ゆ○廣十二
歩の、四字落た
て、二年紀に據り

訶嘖追還、于時巨勢大臣奏請之曰、方今不伐新羅、於後必當有悔、其伐之狀、不須擧力、自難波津至于筑紫海裏、相接浮盈艫舳、召新羅、問其罪者、可易得焉

三年春正月己未朔、元日禮訖、車駕幸大郡宮、自正月至是月、班田既訖、凡田長三十歩、廣十二歩為段、十段為町、段租稻一束半、町租

て補ふ、如此同文な再ヒ記せるも、減租を知らしめむためなり○段祖稲以下、十二字原本細字に作れり、集解に改めたるに従ふ○丙寅九日○壬寅十五日○惠隱、此僧に無量寿経を説かしむると、舒明紀に見えたり○論議者、按に僧等の論議、志べく見えたり、此も校究もる役にや○丁未廿日○雨氷、原本雨水に作て、ミソレフルとよめれど、氷の誤りなれば改む、神武紀に、天陰而雨氷○宅屋、和名抄に、宇夜加須と注し、推古紀に舎屋、遊仙窟に堂舎をよめり、○五十戸為里ハ、二年紀に見えたり○戸主、戸令義解に、謂嫡子也、凡継嗣之道、正嫡相承、雖有伯叔、是為傍親、故以嫡子為戸主也○五家相保、戸令に凡戸ハ皆五家相保、一人為長、以相撿察、勿造非違云々、是ハ俗に五人組と云ものなり、後漢書百官志に、里有里魁、民有什伍、善悪以告、里魁掌一里百家、什主十家、伍主五家○十二月晦、原本晦を皆に誤まり、通證に改めたるに従ふ○大捨、僧らに物など施すを捨と云、カキて捨る状の辞、萬葉十三に、掻将棄破薦乎敷而、後捨遺集に、かき捨るなまのあまりぞそなありと云々

稲十五束、三月戊午朔丙寅、車駕還宮、夏四月戊子朔壬寅、請沙門惠隱於内裏、使講無量壽經、以沙門惠資、爲論議者、以沙門一千、爲作聽衆、丁未、罷講、自於此日、初連雨氷、至于九日、損壞宅屋、傷害田苗、人及牛馬溺死者衆、是月、造戸籍、凡五十戸爲里、每里長一人、凡戸主皆以家長爲之、凡戸皆五家相保、一人爲長、以相撿察、新羅百濟、遣使貢調獻物、秋九月、造宮已訖、其宮殿之狀、不可殫論、冬十二月晦、請天下僧尼於内裏、設齋大捨燃燈

壬戌十二日○道嚴ハ崇峻元年紀ニ見ヱて、此ニ至り六十一年を経たり○道光、持統八年紀ニ、贈律師道光賻物とあり、今年より四十七年の後之

四年夏五月、辛亥朔壬戌、發遣唐國、大使小山上吉士長丹、副使小乙上吉士駒、駒更名糸、學問僧道嚴、道通、道光、惠施、覺勝、弁正、惠照、僧忍、知聰、道昭

○覺勝、下の細字ニ、於唐死とあり○弁正、懐風藻ニ、弁正法師者、俗姓秦氏、性滑稽善談論、少年出家、頗洪玄學、大寶年中遣學唐国、時遇李隆基龍潛之日、以善圍碁見賞遇とあるハ、同人カ、此四年ハ二十歳としても、七十余なり、且續紀七養老元年七月、以沙門辨正為少僧都とあり、九十余なり○知聰、次の細字ニ、於海死○道昭、續紀一道昭傳ニ、和尚ハ河内国丹比郡人也、俗姓船連、父ハ惠釋云々、猶此僧の事ハ扶桑略記今昔物語十一、元亨釋書等ニ見ヱたり○定惠、元亨釋書ニ、定慧ニ作り、

定惠、定惠ハ内大臣之長子也、安達、安達ハ中臣渠毎連之

大織冠之長子也、初孝徳帝有妃、孕已六月、大織冠寵遇厚、賜妃為夫人、約曰、所生兒若男為卿子、女為朕子、既而生慧、故名之以鎌足之子、投沙門慧隱出家、白雉四年、隨遣唐使浄海、乃到長安城、高宗永徽四年也、師慧日寺神泰、習學殆十歳、調露元年、伴百濟使而至云々、慧和銅

子、道觀、道觀ハ春日粟田臣百濟之子、學生巨勢臣藥、藥ハ豐足臣之子、氷連老人、老人ハ眞玉之子、或本以學問僧知辨、義德、學生坂合部連磐積、而增焉、百二十一人、俱乘一船、以室原首御田為送使、又大使大山下高田首根麻呂、更名八掬脛、副使小乙上掃守連小麻呂、學問僧道福、義向、并一百二十人、俱乘一船、以土師連八手為送使、

七年化○渠毎ハ、中臣本系帳ニ、糠手子大連公一男、右大臣大錦上金二男許米、被賜朝臣姓○氷連、姓氏録ニ、氷宿祢、神饒速日命六世孫、伊香色雄命之後也、天武十三年紀ニ、氷連賜姓曰宿祢○義徳、持統四年紀ニ、唐より帰朝と而て○坂合部連磐積、天智天武等紀ニ、石積ニ作まり、即新字四十四巻の作者なり○室原首、日本後紀十二ニ、小十二月王等三人、賜姓室原真人、和名抄ニ、大和国城下郡郷名室原○高田首ハ、上の高田醜ニ注せり○八掬脛、景行紀に、七掬脛と云人見ヘたり、脛長き人ニや○旻法師ハ、僧旻の事○阿曇寺、續紀十五ニ、帝幸安曇江、覧松林、云々、今大坂安堂寺町、即其地にて、安曇寺の轉なり、此地奈良朝の頃までハ、海邊にて、御津ても地も遠からず○狛堅部詳ならば○鯽魚戸直名を浅せり、姓氏録ニ道祖史、百濟国王孫許里公之後也、三代實録六ニ、正八位上道祖史豊冨賜姓惟道宿祢、阿智使主之黨類、自百濟国来帰也云々○川原寺、天武紀ニ、寫一切経於川原寺、又運川原寺伎楽於筑紫、續紀卅一ニ、設斎於川原寺、など見ゆ、大和志ニ、在高市郡川原村、一名弘福寺、唯大悲堂一宇尚存○山田寺、上ニ見ヘたり○薩麻ハ薩摩ニて、名義ハ火火出見尊、去妻の故事ニよれるとぞ○竹嶋、神代紀ニ、登長屋

是月、天皇幸旻法師房、而問其疾、遂口勅恩命、或本、於五年七月云、僧旻法師臥病於阿曇寺、於是天皇幸而問之、仍執其手曰、若法師今日亡者、朕從明日亡、六月、百濟新羅遣使、貢調獻物、脩治處處大道、天皇聞旻法師命終而、遣使吊、并多送贈、皇祖母尊、及皇太子等、皆遣使吊旻法師喪、遂爲法師、命畫工狛堅部子麻呂、鯽魚戸直等、多造佛菩薩像、安置於川原寺、或本云、在山田寺、秋七月、被遣唐使人、高田根麻呂等、於薩麻之曲竹嶋之門、合船没死、唯有五人、繋胸一板、流遇竹嶋、

之竹嶋と、ある
ニ注せり○門
部、姓氏録ニ、門
部連、牟須比命
兒、安牟須比命
之後也、天武十
二年紀ニ、門部
直賜姓曰連○
神嶋、三代實録
廿九ニ、授肥前
国正六位上神
嶋神従五位下、
今彼国の輿地
を見るニ、長崎
より西南海中
ニ、神嶋あて、是
り、釋紀ニシトチシマとよめるハ、彼地の方言なるべし○皇太子、原書ニ皇字
脱せり、通證ニ補ひたるに従ふ○皇祖母尊ハ、皇極天皇なり○間人皇后ハ、

不知所計、五人之中、門部金採竹為筏、泊于神嶋、凡此五人經六日六夜、而全不食飯、於是褒美金進位給祿、是歳皇太子奏請曰、欲冀遷于倭京、天皇不許焉、皇太子乃奉皇祖母尊、間人皇后、并率皇弟等、往居于倭飛鳥河邊行宮、于時公卿大夫百官人等、皆隨而還

舒明天皇の皇女ニて、孝徳天皇の皇后なり○皇弟ハ天武天皇○飛鳥河邊行
宮、大和志ニ、在高市郡飛鳥村、南傍有井名行幸井、按ニ皇太子の御所為是を下
状ニして論ず、いつニ稱奉らむ、佛ニ溺て漢ニ阿て制度を華や移ひしも
天皇の御心ニあらず悉く皇太子の御所為といえざるなえバ究かしこ
山碕ハ、和名抄
山城国乙訓郡、
山埼郷あり又
河内国交野郡
ニも、山埼と云
地あて○𦀌娜
紀都該ハ、鉗着
なり、和名抄刑
罰具ニ、鉗ハ以鐵
束頸也、和名加
奈岐、西宮記臨時着鈦例、條ニ、看督長仰云、取鈦禮細字に此云加奈支と礼云々、
此かな木のとハ、祝詞弁蒙ニ委ク注シおけるが、爰ニ略ス、按馬ニ鉗以て絆ぐとく、皇
后を深宮ニかきて、出し移さざるしを喩より○阿我柯賦古麻播ハ、我飼駒者
ニて、駒ハ皇后にたとへ移へて○比枳涅世儒ハ、牽寝せバニて、比枳とハ駒ニ

由是天皇恨欲捨於國位、令造宮於山碕、乃送歌於間人皇后曰、𦀌娜紀都該、阿我柯賦古麻播、比枳涅世儒、阿我柯賦古麻乎、比騰瀰都羅武箇

縁をとり、扨この頃はひきゐて寝給ひしとぞ○阿我柯賦古麻呂は、上におほ
し○此騰涨都羅武箇は、人将見欲にて、一首の意からてれて、甚おそれなり
壬子五日○紫冠は、三年紀に 五年春正月、戊申朔夜、鼠向倭都
制給ふ、十三階の五六等に當 而遷、壬子、以紫冠授中臣鎌足連、
とす○鎌足は鎌子におなじ、 増封若干戸、二月遣唐押使、大錦
然は爰に至て、始て鎌足と称 上高向史玄理或本云、夏五月遣唐押使、大華下高
そるは、遣證に以前書鎌子、至 向玄理 大使小錦下河邊臣麻呂、副
此時更名乎と云り○押使の 使大山下藥師惠日
押は、惣の意にて、後世押領使と云るもおなじ、共に其事を惣知處の使なり、元
亨釋書圓仁傳に、到登州押新羅使張詠宅、五代史四夷傳に、押領還蕃、唐書契丹
傳に、押蕃落使、押奚契丹使など多かりし

判官は、三等の官にて、和名抄に、萬豆利古止比止と注せり 判官大乙上書直麻呂、宮首阿彌
陀或本云、判官小山下書直麻呂小乙上崗君宜、
○宮首、此姓の起る所詳ならず、 置始連大伯、小乙下中臣間人連
神代紀に、吾兒宮首者、即脚 老老、此云於喩 田邊史鳥等、分乘二船、
摩乳とあるは職名なり、氏人 留連數月、取新羅道、泊于萊州、遂
も續紀二に、宮勝木實と云人 到于京、奉觀天子
見ゆ、勝は尸なり○阿弥陀は名なり、加ゝる忌々しき称をも、古へは好みて名づけ
し人多かりし、續紀八に、志我閉連阿弥陀、同三に、文忌寸釋加、同書に、衣縫造孔子、
支那書には、北史京兆王黎傳に、韓文殊、同齊紀に、衞菩薩、同周紀に、孝閔皇帝諱
覺字は陀羅尼、隋書楊昇傳に、楊昇字文殊、唐書回鶻傳に、有時健俟斤者、子曰菩薩
など、枚擧に遑あらず、續紀廿九に、勅云々或以国主国継為名、向朝奏名、可不寒
心、或取真人朝臣、立字、以氏作字、是近冒姓、復用佛菩薩及賢聖之號、毎経聞見不

安于懐云々○崗君、姓氏録ニ、岡連圖王、男安貴之後也、續紀十七ニ、市往泉麻呂賜岡連姓云々、勝寶六年八月四日、百部法華経を、百人ニ分寫する、交名の古文書ニ、岡大津と云ふ人見えたり○置始連、姓氏録ニ、大椋置始連、長谷置始連見えたれど、姓祖れのく別なれバ、詳ならず○大伯、續紀二ニ、大伯内親王見え、是をオホクとよむべし、其由天武紀、大來皇女ニ注すべし○中臣間人連、姓氏録に、間人宿祢、神魂命五世孫、玉櫛比古命之後也○萊州ハ、唐書地理志ニ、河南道萊州とあり○天子ハ唐の李治と云ふものにて、後ニ高宗と云へり、然るニ爰ニ我天皇と等並ニ、天子と記せるハ過称なり、語ニはコキシと唱ふべし

東宮監門、唐書百官志、東宮官、下ニ、太子左右監門率府率各一人、副率各二人、掌諸門禁衛○郭丈擧ハ、本史外の人なり、丈を文の誤りとしても、唐書ニ

於是東宮監門郭丈擧、悉問日本國之地里、及國初之神名、皆隨問而答、押使高向玄理、卒於唐、伊吉博得言、學問僧惠妙、於唐死、知聰於海死、智國於海死、智宗以庚寅年、付新羅船歸、覺勝於唐死、義通於海死、定惠以乙丑年、付劉德高等船

は見えハ○伊吉博得、姓氏録ニ、伊吉連、出自長安人劉揚雍也、天武十二年紀ニ、壹伎史賜姓曰連、姓氏録ニ、壹伎直ありて、混ずべからば、扱博得ハ、續紀二ニ、博德ニ作て、律令撰定ニ加ハれり○庚寅年ハ、持統天皇四年なり○乙丑年ハ、天智天皇四年ニ當れり○倭種は皇国人彼地の婦を娶りて、生たる子を云ふ○吐火羅国、齊明紀ニ、覩貨邏国に作れて、隋書西域傳ニ、吐火羅国、都葱嶺西五百里、與挹怛雜居、都城方二里、勝兵者十萬人、皆習戰、其俗奉佛兄弟同一

歸、妙位、法勝、學生氷連老人、高黄金并十二人、別倭種韓智興、趙元寶、今年共使人歸

夏四月、吐火羅國、男二人、女二人、舍衛女一人、被風流來于日向、

秋七月、甲戌朔丁酉、西海使吉士長丹等、共百濟新羅遣使、泊于筑紫、

是月、褒美西海使等、奉對唐國天

妻、送寝息云々、唐書西域傳に、子、多得文書寶物、授小山上大使

吐火羅、或曰吐谿羅、曰覩貨邏、吉士長丹、以小華下、賜封二百戸、

元魏謂吐呼羅者、居葱嶺西烏賜姓為呉氏、授小乙下副使吉士

滸河之南、魏書高宗紀に、吐呼駒、以小山上

羅国、遣使朝獻○舍衛齊明紀、吐火羅人、共妻舍衛婦人来云々、太平御覧、七百九十七に、支僧載外国事を引て、曰舍衛国、今無復王、盡属播黎曰国王、遣小兒治国人、不奉佛法云々○丁酉廿四日○西海は、支那国を指せり、支那人亦皇国を、東海と稱せり○呉氏は、姓氏録に、百濟国人、徳率呉伎側之後者

壬子十日○百舌鳥は、和泉国冬十月癸卯朔、皇太子聞天皇病

大鳥郡の地名にて、今毛受荘疾、乃奉皇祖母尊、間人皇后、并率

と云、和名抄に同郡土師郷あり皇弟公卿等、赴難波宮、壬子、天皇

ヱ○主殯宮は、職員令の、喪儀崩于正寝、仍起殯於南庭、以小山

司の關處○已酉廿四日○大上百舌鳥土師連土徳、主殯宮之

坂磯長陵、諸陵式に、大坂磯長事、十二月壬寅朔己酉、葬于大阪

陵、在河内国石川郡、北域東西磯長陵、是日皇太子、乃奉皇祖母

五町、南北五町、守戸三烟、志に尊、遷居倭河邊行宮、老者語之曰、

在同郡山田村、原本磯を、機に鼠向倭都、遷都之兆也、是歳高麗

誤る○乃奉、原本乃を母に百濟新羅、遣使奉弔

作れを、類聚国史に據て改む

日本紀標注巻之二十 終

廿四年十月十六日納本
内閣文庫
国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan